ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第51号　2019年3月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　運動部と大学	山本　剛	2
逸話と世評で綴る女子教育史（51） ―女義太夫・女役者・女優・女政治家の登場―	神辺　靖光	5
学都やまぐちトークライブに登壇して ―旧制山口高等中学校（山口高等学校）と北條時敬―	谷本　宗生	10
明治後期に興った女子の専門学校（6） 『女学雑誌』と『文学界』	長本　裕子	12
教育史研究の周辺⑩ 学校を経由した社会移動研究（再生産戦略編②）	加藤　善子	16
カレッジノベルの研究への道（3） ：アメリカの研究に見るカレッジノベル（2）	吉野　剛弘	19
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（17） ― 法政大学史センター ―	田中　智子	22
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で 「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（4）	冨岡　勝	27
我流・文献紹介(12)　―中高連の「要望書」、審議会の 「改善答申」「高校指導要領改正」について―	神辺　靖光	29
月刊ニューズレター　『現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて』　総目次（第 1 号～第 50 号）	雨宮　和輝	33
刊行要項（2015年6月15日現在）		47
急募！　灘中学校・高等学校の史料整理・目録作成に興味あり ませんか？	加藤　善子	48
短評・文献紹介		49
会員消息		51

コラム
運動部と大学

山本（やまもと）　剛（たけし）
(早稲田大学)

今から100年ほど前の1918（大正7）年12月、公私立大学は公認された。国家によって正式に「大学」として認められたこと、それは設立当初から「大学」への強い上昇志向にあった私学にとって、喜ぶべき一つの達成であった。

初の私立大学に認められた慶應義塾は、その学内紙『三田新聞』(1919年4月7日)で、同大学予科主任の田中萃一郎が、「官私学の差別」が撤廃された今、「官立と同じ」になっただけではなく、官立大学に「引けを取らぬ」心がけを持つことをのぞむと、新入生にむけて鼓舞していた。帝国大学と同等になった今、これからは私学も大いに発展しようではないか、というのである。

私学の学生たちは大いに奮起したのではあるまいか。同じく大学に認められた早稲田でも、「学士様」になれる喜びで「有頂天」になっていた。

だが、その一方で、1920(大正9)年4月4日の『読売新聞』に「大学昇格は嬉しいが採点の厳しさが痛い　慶應では予科一年で落第三百名　運動部員の悲憤に総ストライキ説」と題して、次のような記事が報じられた。

> 大学に昇格した丈けに慶應早稲田の学生連は試験答案の審査にも是迄通りの寛容な処分は夢見る事もできない。慶應では柔道部の先輩がそれと無く塾監局に出頭して部員の及落の多寡を伺ひ立てると、落第は落第、及第は及第、試験官の眼には既に涙は無いといふ始末に　真赤に怒り出し　為めに運動部では今度の運動会には一同総ストライキを起して示威運動をやらうとする形勢があると言ふ

この記事は、もう両校が正式な大学として認可されるのだから、これまでのような「寛容」な試験の採点はしないとして、大学当局は毅然たる方針で成績評価を行ったことを伝えたものである。慶應義塾予科一年の落第者300

名のうち運動部員がどのくらい含まれていたのかはわからないが、「試験答案」の厳しい「審査」に運動部員は「頭を悩まして」いるものが多数であった。

こうした血も涙もない大学の「試験官」によって、早稲田では「点の辛さ」で「頭痛」になり、また腹を立てた慶應義塾の運動部員は、次の「運動会」には「総ストライキ」で「示威運動」を決行する意向だという。

ある運動部員は言う。「新大学令も好い。選手を挙げて賛成する。然し制度の為めの犠牲には吾々は成り度く無い、学生の個性も幾分か尊重して欲しい」と、大学昇格はたしかに嬉しいが、そのための「犠牲」にはなりたくない、学生の「個性」を尊重しろと涙ながらに訴えるのである。結局、慶應義塾では「野球部を始めとして運動部は殆ど全滅の悲運に膠着している」ようであった。

先の大学予科主任田中萃一郎は、こうした運動部員の「悲憤」を受けて次のように言う。すなわち、「運動部が全滅？　止むを得まいさ、授業には碌々出ないし、一学期、二学期も試験を受け無いとすれば、新大学令の有無に拘らず早晩来る可き運命は落第さ。況んや昇格した以上今度から情実を棄てて規定を厳守する事に成つたのは事実であ」り、試験の「採点が厳格」になったのであると語り、たしかに「運動部の憤慨は同情に値する」が、「学校としてはやむを得ない」ときっぱりと言い放ったのである。

国家によって正式な「大学」として認可されるのも運動部員にとっては「痛い」ものである。

さて、現在の大学の運動部員はどうなのか。もちろん授業には出席するし、試験も受けている(と思う)。さすがに「情実を棄て規定を厳守」したからといって、「総ストライキ」で「示威運動」はしない(だろう)。

2000年に早稲田大学では、「体育各部の強化策に関する理事会の基本方針」を策定し、2008年には「早稲田スポーツのネクストステップ」と「早稲

田アスリート宣言」を公表するなど、大学スポーツのあるべき姿を提言している。ここでは大学のスポーツは「勝てばよい」だけではないことが強調され、「教育としてのスポーツ」と「文武両道を高いレベルで実践し、社会の様々な分野でリーダーとして活躍できる人材を世に送り出すこと」が確認されている。

続く2014年には早稲田大学の全ての体育各部部員を対象とした教育プログラム「早稲田アスリートプログラム(WAP)」がスタートした。この教育プログラムを見ると、学生アスリートのための「人格陶冶のための教育プログラム」と、学期ごとに取得する基準単位を設定して、4年間で運動部の学生が卒業できるよう「修学支援」を行うことが明記されている。特に、この「修学支援」は、単位取得のためのアドバイスや学習面等のサポートを行う「アカデミックアドバイザー」を配置して、「すべての部員の学業情報」を把握し、「部員が学業成績不良者となることを未然に防ぎ、標準修業年限（4年間）で卒業」することを徹底するというのである。

なぜ、早稲田がこうした教育プログラムを運動部員にスタートさせたのか、その背後にはどのような問題があったのか、ここでふれる余裕はない。日本の大学はスポーツをどのように捉え、運動部の学生は学業とスポーツをどう両立させていけばよいのか、興味深いテーマである。

ちなみにこれまで筆者の授業を受講した運動部の学生の期末レポートは、どれも見事な内容であり、最も高く評価されるものばかりであった。

参照：『早稲田アスリートプログラム　テキストブック』(2016年、早稲田大学競技スポーツセンター)。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（51）

―女義太夫・女役者・女優・女政治家の登場―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

人前に姿を現わす皇后や総理大臣夫人、ヨーロッパの貴族夫人や大学教授となって活躍する日本女性が明治の中後期に現れたことを述べたが、上流社会だけでなく、庶民の間に才女が登場したのも明治中期の特色である。最も目立ったのが芸能界である。

図Ａ　女義太夫の図

義太夫節（ぎだゆうぶし）は大坂の竹本義太夫が創始した語り節であるが、その筋書が人形浄瑠璃だけでなく、歌舞伎にもとり入れられて江戸でも盛んになった。歌舞伎芝居の贅沢な娯楽を手軽な遊びにしたものが寄席（よせ）である。江戸・東京には数え切れぬほどの寄席があった。本来義太夫語りは男性であるが、文化文政頃から女義太夫語りがボツボツ現れたらしい。明治十五六年頃から東京の寄席は女義太夫の独占場になった。それは竹本綾之助という美少女が男装して高座にあがり持前の美声で若い男性、特に学生の人気をさらったからである。こうして明治期に講談・人情噺と並んで女義太夫という新しいジャンルが寄席に登場したのである。

歌舞伎は本来、出雲のおくに指導の妓たちが踊る芝居であったが、徳川幕府の統制によってこれらは追放され、男優ばかりの演劇になった。ところが明治初年に岩井条八という女役者が現われて、その門人たちによって女役者の歌舞伎芝居が行われた。彼女は幕末、踊の坂東美津代門下であったが、歌舞伎の岩井半四郎の弟子になって岩井条八を名乗り、両国の小屋掛芝居に打って出たのが明治六年、それから各地の芝居小屋をへて明治十五、六年頃には本所緑町の寿座で門下の役者連と一座を組むようになった。打つ芝居は「寺子屋」「道成寺」「山姥」などの歌舞伎ばかり。依田学海などの一流の劇評価に肩入されて市川團十郎の門下になって市川升之丞（ますのじょう）と名乗ったが「勧進帳」を無断で演じたために破門され、岩井条八に戻った。顔立も音声も全く男のようで所作事も天下一品と称され、人気が騰った。一座を引き連れ地方公演も行い、26年、東京神田の三崎座を女芝居興行の専門道場にした。演技抜群で明治の歌舞伎界に女芝居を打ち立てた傑物であった。

図Ｂ　女役者岩井条八

岩井条八は女役者として気を吐いたが、それは旧来の歌舞伎芝居の中でのことであった。これに対し、次に述べる川上貞奴（さだやっこ）は明治の新しい芝居の女優として日本及び欧米の舞台に立って人気を博したのである。

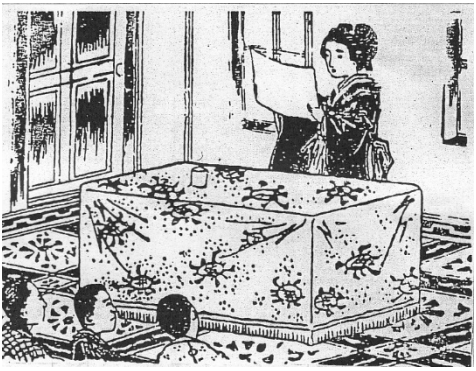
貞奴は東京日本橋芳町の芸妓であったが、オッペケペー節と壮士芝居で一大旋風を巻き起した川上音次郎の妻になった。川上は若い頃から自由民権の闘士として何回となく逮捕されたが、明治22年、黒木綿の筒袖に陣羽織姿で“権利幸福嫌いな人に自由湯を飲ませたい”オッペケペッポーペッポッポーと唄いまくった。これが東京で絶大な人気を博した。彼はさらに書生芝居と銘打って「経国美談」や「板垣君遭難実記」を上演した。次いでシェイクスピアの「ハムレット」など翻案、日本化した劇を上演したが、妻の貞奴を主演女優に採用した。貞奴はそれによく応えて名演技をくり拡げた。32年、川上一座が渡米してからはサンフランシスコ、ニューヨークの舞台に立ち、さらにパリ、ロンドンを巡演してマダム貞奴の名を高め、パリ社交界の花と謳われた。41年、東京に帝国女優養成所を開いたが、これは挫折、女優養成事業は帝国劇場に引き継がれた。川上貞奴は日本の女優第一号と讃えられるべき女性である。なお川上一座の芝居は後年、花柳章太郎らの新派劇の元祖とされているが、涙もろい人情劇の新派と川上の社会劇とは思想的には異質でつながらない。

図C　川上音次郎のオッペケペー節ちらし広告

図D　川上　貞奴

このように寄席や芝居の世界に多くの女性が進出し、新しい芸を開花させたのが明治中期の特徴であるが、政治演説でも新しい女性が現れた。

西南戦争の終結で士族の武力反抗は終り、言論による政府との対決に変った。明治11年の愛国社再興大会、13年の国会期成同盟、政府の集会条例公布は自由民権運動の高揚を示す画期であろう。闘士たちは街頭に出て演説した。それは忽ち女性に感染して各地の演説会に女性が登壇するようになった。明治16年1月22日の「絵入朝野新聞」は越後柏崎の西福寺で政談演説会が開かれた時、西巻開耶（にしまきかいや）という女性の祝文朗読を次のように記している。



図Ｅ　「絵入朝野新聞」挿絵

> 抑（そ）もそも此開耶女史は学校教員にして其風姿高尚なり、且容貌うるはしく開耶の名にし因（ちな）みて額は霞のうちに現われ、芙蓉の眸（まなじ）り丹花の唇（くちび）る肌膚（はだえ）は越後の雪に似たり、当年稍（とうねんよう）やく十七年、祝文朗読の声は玲瓏として聴衆静粛たり、読み終るや拍手喝采の声満場に湧く

祝文朗読の17歳の女性が別嬪だというばかりで祝文の内容も、他の演説も記していない。冷やかし半分の記事である。この程度であっても若い女性が政談演説会に登壇しただけで世の耳目を集めたのである。しかしながら同じ16年の10月19日の「朝野新聞」の記事は全く違っている。

> 有名なる女弁護士岸田俊子は去る12日の夜滋賀県大津四の宮の劇場にて学術演説会の節、箱入娘という題にて滔滔瓣ぜられたるが、閉会の後、該演説は政談に捗りしとて直に警察署へ拘引になり、監獄署へ送られしと

岸田俊子は京都下京の古着商の娘、和漢の勉強をして府知事槇村の推せんで宮中に上り皇后に『孟子』を進講した。その後、立志社の民権家と交流し、15年4月、大阪道頓堀の日本立憲政党主催の演説会で「婦女の道」を演説して脚光を浴びた。それを機会に女性の演説家や民権家が彼女のもとに集り、それら岸田社中を率いて各地で演説会を行った。「箱入娘」の演説は日本女性の結婚の在り方を批判したものである。これが集会条例違反に問われて8日間の未決監生活の後、罰金5円を払って釈放された。やがて政治家中島信行と結婚。中島は初代衆議院議長になった。その頃から俊子は次第に演説活動から文筆活動に移り、政治家の妻として生涯を終った。昭和期の実業家中島久万吉はその子息である。

図F　岸田俊子

岸田俊子の演説を聞いて発奮し、民権政治家になったのが景山英子である。即ち明治15年5月、俊子の「岡山県女子に告ぐ」を聞いて自由民権運動に参加、17年、大井憲太郎らの朝鮮改革運動（大阪事件）に加わり、18年秋に爆発物を東京から大阪まで運搬して11月、逮捕された。公判は20年5月から始まったが被告64名中唯一の女性としてジャーナリズムにまつりあげられ、裁判中『景山英女之伝』が出版された。出獄後、民権家福田友作と結婚、後、社会主義者として婦人解放の執筆活動を行った。

図G　『景山英女之伝』

参考文献

山本笑月『明治世相百話』
『湘烟日記』
吉川弘文館『明治時代史大辞典』全4巻中　川上貞奴、福田英子

学都やまぐちトークライブに登壇して
―旧制山口高等中学校（山口高等学校）と北條時敬―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

明治維新から150年を迎えたさ中、山口大学とまちなか大学実行委員会が企画運営する「学都やまぐちトークライブ」（2019年2月23日）に、ふとしたご縁から私（谷本）にトークセッションの部で登壇し、ぜひ山口の教育史的な背景について講演してほしい旨の要請を受けた。

トークセッションの部で、もう一方の登壇者は山口大学名誉教授（放送大学山口学習センター長）の岡村康夫先生で、座禅にもっとも打ち込み西田哲学の基礎を築く「山口時代の西田幾多郎」について講演された。岡村先生は、現在山口市内にある西田幾多郎の旧宅にて、週1回ほどのペースで哲学・思想を考える「山口西田読書会」を開催されているという。その西田が、山口高等学校の教壇に立つのが、1897（明治30）年9月からであり、西田の恩師にあたる北條時敬が当時、山口高等学校長を務めていた背景がある。

いっぽう私（谷本）の講演は、旧制山口高等中学校（山口高等学校）と北條時敬という趣旨でもって話を進めていく方向とした。山口の子弟らの教育機会の奨励に力を注ぐ防長教育会が、山口高等中学校（山口高等学校）の財政面を支えたが、教育史の先行研究にもあるとおり、1898年からの無試験入学是正（1902年、総合選抜制の導入）によって、自主裁量権を失っていく契機となる。したがって北條が校長を務めていたのは、いまだ准官立の山口高等学校時代である。西田によれば、恩師の北條は「先生は元来無口で…自分も先生が何か言われるまで黙っていようと思い、夜遅くまで黙って対座していた」（丸山久美子『北條時敬の生涯　双頭の鷲』2018年、103～

104頁）と回想する。山口時代の教育者としての北條については、「北條が語ると学生たちは蘊蓄のある話と受け止め、自らを律し、成長させ、お互いに切磋琢磨して山口高等学校の校風を作り上げていった」（丸山『同上書』107頁）と評価されている。

北條が山口に赴任した当初、山口高等中学校の寄宿舎生ら200名以上がすでに騒動を起こし除名処分となっており、校長の岡田良平とともに山口に赴任した北條が、事態の収拾にあたり除名処分の生徒らを復学させる措置をはかる。そこで、『山口高等学校一覧』（自明治27年至明治28年）をみてみると、「生徒心得」（第8章）では、校則を遵守し、学業に励み品行を慎み、摂生に注意し身体健康を図り、学校の体面を汚さずなどとされる。「生徒処分」（第9章）では、軽重により謹慎、停学、除名、放校の処罰をかすとする。さらに「伍組編制」（第12章）では、学級は各級長（教官）のもと、若干名の伍長（生徒）を置き、「各長ハ常ニ其所属生徒ノ行状及勤惰ヲ監視シ不都合ノ動作ナカラシムルコトニ注意スベシ」と明記されている。同年度生徒数355名（大学予科1部1～3年55名、同2部1～3年65名、同3部1～3年14名、高等中学予科1～2年221名）。

北條は山口高等学校生らに対して、自身の教育理念にそくして、次のような祝詞演説（1906年7月）を行っている。「国家ノ仕事ノ仕上ゲヲ為ス為メニハ精良ナル人物ヲ得ルヲ要ス精良ナル人物トシテノ資格ノ一方面ヲ挙グレバ左ノ如シ善良ニシテ敏才働キアルコト細密ニシテ雄大ナルコト着実ニシテ有為ナルコト個人ノ一身ヲ立テテ国家社会ノ利益ヲ謀ルコト…諸君ノ成功ハ学校教育ノ目的ナリ防長教育会有終ノ成功ナリ」（『廓堂片影』1931年所収）

明治後期に興った女子の専門学校（6）

『女学雑誌』と『文学界』

長本（ながもと）　裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

巌本善治は、『女学雑誌』241号（明治23年11月29日）に、一般婦人のために、文字を平易にし、内容を実際的なものにし、丁寧に説明するという改進の方針を発表した。時局に刺激されて、社説・論説的内容の高度化を行ったため、上層の読者と従来の女性読者層との差が拡大したからである。そこで、中島俊子（評論）、若松賤子（文芸）、田辺花圃（文芸）、荻野吟子（医学・衛生・看護）、清水豊子（編集）ら8名の女性を起用した。上層の読者に対しては毎月1回本誌半分の付録を添えた。上下層とも抱え込みながら女性の地位向上を図った。

25年に入ると『女学雑誌』は変動期になる。巌本は3月から5月まで中国四国九州を漫遊して、世の中の様子を見聞し、愛読者と会談した。この間巌本は社説の代わりに、「迎春行」と題して旅行記を載せた。代わって北村透谷と星野天知が活発に活動した。2月6日と20日に連載された透谷の評論「厭世詩家と女性」は、「恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり、恋愛ありて後人世あり」で始まり、青年男女に衝撃的な感動を与えた。それ以降、透谷は毎号のように評論を書き、天知は茶道や老子を語った。こうして文芸的傾向が急激に高まった。

帰京した巌本は『女学雑誌』の大改革にのりだす。25年6月から青年男女のための文学雑誌的なものを白い表紙で「白表」と呼ばれるものに、従来の晩学または老成の婦人のためのものは赤い表紙で「赤表」と呼ばれるものに二分した。毎週同じ号数で交互に出す。「白表」は天知に編集を任せた。

赤表は巌本が編集にあたった。巌本は両方の社説を書き分けるが、かつてのような名論説は見られなくなる。

22年ごろから、巌本は明治女学校と女学雑誌社の財政を立て直すために、天知を迎えていた。天知の兄嫁の増田たき子が巌本の家に寄寓していた縁であった。天知は、巌本の風采と態度の謙虚さ、武芸教育に対する理解に感動して、武芸の指導と漢学の講義を引き受けた。

23年5月、巌本は、文芸による女子の情操教育を志して、京浜の18女学校の文学会連合機関誌の性格をもった『女学生』を女学雑誌社から発行し、天知を主筆とした。25年夏に出した『女学生』の夏季臨時増刊号が好評で、たちまち売り切れになった。島崎藤村、透谷、平田禿木、天知が執筆し、大いに文学熱が上がった。「白表」も『女学生』も文学雑誌の色彩が濃くなり区別がつかなくなったため、二つを合併して女流文学の雑誌を出したらどうかと巌本が提案した。

天知は、『女学生』の編集を手伝っていた禿木や戸川秋骨、藤村らと相談し、26年1月『文学界』第1号の発行となった。創刊号は1500部発行し、10日ほどのうちに売り切れた。1000部増刷したがそれもたちまち売り切れとなるほど反響が大きかった。

『文学界』創刊号に巌本は「文章道」を載せた。文章が高潔になるためには道念が高潔でなければならないという道義主義が、同人の文学青年たちから忌避された。禿木や秋骨らは西欧近代文学の影響を受け、純文学中心の雑誌にしたい意向が強かった。『文学界』は4号から女学雑誌社を離れて独立する。天知が編集者となり、経済面も天知が負った。『文学界』は女流文学の機関紙を目指したので、三宅花圃（旧姓田辺）の紹介で樋口一葉が参加した。一葉は「大つごもり」や「たけくらべ」を掲載した。断続的に掲載さ

れた「たけくらべ」が、『文芸倶楽部』（博文館刊行）に一挙掲載されると、森鷗外や幸田露伴が絶賛した。一躍女流作家樋口一葉は時の人となった。

25年1月木村熊二が校長を辞任し小諸へ去った。『文学界』創刊あたりから同人の文学青年たちは巌本から離れ、片腕であった天知も、巌本の本性がわかると、27年には明治女学校から離れてしまった。かつて巌本は、天知と明治女学校同志の犬養恵国に、「教育事業は神の配下で働くという覚悟を要する。君等と自分はこの中心にいるから、居所も散在していては団結力も強固にしがたい。校舎付属の長屋へ移住して、この神聖な事業を財政で破滅しないようにしよう」と誓約した。天知も犬養も感激してさっそく長屋に移住した。天知らは日夜教育の仕事に奮闘し、武道科は著しく生徒が増えた。天知は武芸を指導し、学科の授業も多くの種類を担当し、深夜まで蒼白になるほど貢献した。しかし、誓約を言い出した巌本が一向に長屋に移住してこない。理由を聞くと「家内が不承知で」と言うだけ。天知は巌本の真意を疑い出した。

日本の女医第1号で、21年ごろから校医として、また、『女学雑誌』にも協力していた荻野吟子も「彼（巌本）は頼朝政略家で」とのみ言い残して北海道へ去った。天知は、巌本夫人賤子との初対面の時の言葉「彼を買いかぶってはいけません。後悔をしている私の実験があります」の意味をようやく理解した。

若松賤子

27年5月の透谷の自殺。藤村は透谷の後、家庭の事情から再び教壇に立っていたが、28年12月に辞任して翌年仙台へ去る。賤子も28年になると病床につくことが多く、あまり執筆しなくなり、『女学雑誌』は魅力を失う。

29年2月5日早暁、若い先生たちが住んでいる長屋の一部を貸していたパン屋から出火し、校舎も寄宿舎もほとんど焼けてしまった。寄宿舎にいた30人ほどの生徒はなんとか無事避難した。病床の賤子は巌本が背負って避難したが、7日から容態が悪化し、10日の朝逝去した。31歳であった。賤子が亡くなって、巌本を制御する人がいなくなった。

『文学界』は天知の編集によって発行されていたが、まん子夫人（明治女学校卒業生の松井まん子）は、武芸の優等生で、教訓以外の小説や文学を嫌った。まん子も親が決めた婚約者がいたが、天知が長年求婚し続けて、やっと結婚したのだった。天知はもともと家庭至上主義であった。文筆をすると、部屋に籠ったり、夜更しをしたり、来客を忌避したり、表情が険しくなったりする。家庭の雰囲気が憂鬱になり、子供の教育が破壊するであろうと、『文学界』の廃刊を決意した。こうして26年1月から31年1月まで58冊を発行し、文壇に若々しいロマン主義の潮流を起こした『文学界』が終刊した。

『文学界』の同人らが巌本から離れたことが明治女学校と『女学雑誌』の衰退を加速した。おりから火災で下六番町の校舎と最も大切な賤子を失った。そして30年2月、郊外の巣鴨に移転することになる。

参考文献

青山なを著『明治女学校の研究』

『女学雑誌』

野邊地清江著「『女学雑誌』概観」（明治文学全集32 筑摩書房）

平田禿木著「絶筆 文学界前後」（明治文学全集32 筑摩書房）

星野天知著『黙歩七十年』（明治文学全集98 筑摩書房）

藤田美実著『明治女学校の世界』

教育史研究の周辺⑩

学校を経由した社会移動研究（再生産戦略編②）

加藤（かとう）　善子（よしこ）（信州大学）

社会移動・再生産戦略の単位

社会移動研究の多くは、これまで個人単位での移動に注目してきたが、「イエの継承」という観点から考えると、その候補者は複数いる。兄に家業を継がせて弟には学校に行かせるといった、兄弟に異なる役割を期待する慣行は、リスク分散の問題としても考えられると井上は言う[1]。

なかでも、兄弟順位に注目して家業継承と教育機会にかかわる仮説や通説は、農業層において研究が蓄積されてきた。農村から都市に大量に移動したのは農家の次三男であるというイメージが強いが、佐藤（粒來）（2004）でも、それはマクロデータからの推測でしかなく、「農村調査からは離村者の長期にわたる詳細な職業情報は得られないのが普通」であるとし[2]、実際に様々な相続の形態があったことを示している[3]。

「農家の次三男」説

「農家の次三男説」とは、農家が長男に家業・家産を相続させると、次三男は離村を余儀なくされるというもので、その代わりに高い学歴を付けされる、という相続と教育との間に代替関係をみようとするものもある。その結果、農家の次三男が都市の新中間層を形成したという仮説もある。

しかし、佐藤（粒來）によれば、農業経済学で行われた先行研究において相続の教育との代替関係がみられるようになるのは、民法で均分相続が定められた戦後になってからで、戦後改革の影響なのだという[4]。「農家の次三

男」説の根拠となっている戦前の長子単独相続性についても、それほど厳格に適用されてきたわけではなく、地域によって相続形態がさまざまであることを示す実証研究もあるという。

そして、佐藤（粒來）によるSSMデータの農業層の分析においても、農家の次三男が長男よりも学歴が高くなるのは東日本であって、西日本では長男の方が学歴が高い傾向が見られる[5]。

都市の会社員の再生産戦略

井上（2006）は神戸一中のデータを用いて、長男優先度／次三男優先度を算出した。結論から言うと、全体の傾向としては長男優先傾向が強く、それは明治末期から大正前期にかけて上昇する。最も長男優先度が強いのは官公吏であり、会社員、近代商業層が続く。長男優先度を次第に増大させるのが鉱工業層であり、逆に長男優先度を次第に低下させるのが教員と農業層である。教員は次三男優先へと転じ、農業層は末子優先となる。在来商業層は長男と末子の優先度に大きな差がない[6]。

最も近代的な価値を身につけているはずの官公吏が、学歴を付けさせるという点においては子どもを最も差別的に扱い、次いで近代的であると考えられる会社員や近代商も長男に優先的に進学機会を与える、というのはなんとも逆説的である（井上は、「近代化された集団ほど封建的に振る舞う」と表現している）[7]。

それに対して在来商業層にとって、学歴取得は戦略的なオプションではなく、それゆえ進学でも就業でも兄弟間の差が小さい。その結果、長男も次三男も商業分野で再生産される割合が相対的に高いという[8]。

農業以外の職業集団において、どのように子どもを差別的に／平等に扱い、学歴を付けさせるということがその職業集団にとって、職業と再生産に直結していたか否か、さらにどのような意味を持っていたか、というバリエーションは明らかにされる必要がある。

井上が指摘するように、近代化過程においては、職業選択（目的）と学歴の取得（手段）が必ずしも一致しない。このような状況で、家の命運をだれに託すかの選択こそが再生産戦略なのだという視点[9]は、ハッとさせられる。

注

1　井上義和（2006）「旧制中学校進学機会における長男優先度の分析」『ソシオロジ』第51巻2号, pp.75-90.

2　佐藤(粒来)香（2004）『社会移動の歴史社会学―生業／職業／学校―』東洋館出版社, p.45.

3　前掲書, pp.45-50.

4　前掲書, p.47.

5　前掲書, p.89.

6　井上義和（2006）「旧制中学校進学機会における長男優先度の分析」『ソシオロジ』第51巻2号, p.84.

7　前掲書, p.88.

8　前掲書, p.88.

9　前掲書, p.75.

カレッジノベルの研究への道（3）
:アメリカの研究に見るカレッジノベル（2）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

前号よりアメリカにおけるカレッジノベルの研究の状況を概観しているが、今号ではアンソロジーではなく、研究論文を中心に見ていくことにする。

アメリカには、カレッジノベルに関する学術論文や著書も複数存在する。筆者がこれまでに入手したものは、以下の表の通りである。

1 Thelin, John R., Townsend, Barbara K., Fiction to Fact: College Novels and the Study of Higher Education, Stuart, John C.(ed.), *Higher Education: Handbook of Theory and Research Vol. IV*, 1988:183-211

2 Rose, Louise Bletcher, The Secret of Sarah Lawrence, Commentary 75-5, May1983:52-56

3 Pittman, Von V., Theliman, John M., The Administrator in Fiction: Portrayals of Higher Education, Educational Forum 50-4, 1986:405-418

4 Kramer, John, College and University Presidents in Fiction, Journal of Higher Education 52-1, 1981:81-95

5 Kramer, John, Images of Sociology and Sociologist in Fiction, Contemporary Sociology 8, 1979.5:356-376

6 Halberstam, Michael J., Stover at the Barricades, The American Scholor,1969:470-476

7 Altbach, Philip G., Reflection on the Jet Set, Journal of Higher Education 57-3,1986:321-323

8 Stone, Laerence, The Ninnyversity, The New York Review, 1971.1.28:21-29

9 Boys, Richard C., The American College in Fiction, College

English 7-7, Apr1946:379-387
10 DeMott, Benjamin, How to write a college novel, Hudson Review 15(2), 1962:243-252
11 Gwynn, Frederick L., The education of Epes Todd, Harvard Alumni Bulletin 51-Feb.12, 1949:388-391
12 Hall, Theodore, Harvard in fiction, Harvard Graduates Magazine 40, 1931:30-54
13 Lyons, John O., *College Novel in America*, 1962
14 Randel, William, Nostalgia for the ivy, Saturday Review of Literature 30(48), 1947.11.29:9-11,39
15 Carter, Ian, *Ancient Culture of Conceit: British University Novel in the Post-War Years*, 1990
16 Rossen, Janice, *The University in Modern Fiction*, 1993
17 Bevan, David, *University Fiction*, 1990
18 Proctor, Mortimer, *The British University Novel*, 195x
19 Showalter, Elaine, *Faculty Towers*, 2005
20 Moseley, Merritt, *The Academic Novel: New and Classic Essays*, 2007
21 Bail, H.V., Harvard Fiction, Proceedings of American Antiquarian Society 68, 1959:211-347
22 Carpenter, Frederic I., Adolescent in American Fiction, The English Journal 46(6), Sept.1957:313-319
23 Hassan, Ihab. H., The Idea of Adolescence in American Fiction, The American Quarterly, Fall1958:312-324
24 Williams, R.H & Willoner, D.J., The School Administrator in Fiction, The Educational Forum 47(3), 1983
25 Lyons, John O., The College Novel in America 1961-1974, Critique 16, 1974:121-128
26 Williams, Jeffery J., The Rise of Academic Novel, American Literary History 24(3):2012Fall

27 The End of Academic Novel, The Weekly Standard, 4.Aug 1997:31-33
28 Begley, Adam, The Decline of Campus Novel, Lingua Franca 7(7), Sept.1997:39-46
29 Hague, Angela, The Academic World in Modern Literature, Midwest Quarterly 26(2), 1985:171-187
30 Lodge, David, The Campus Novel, New Republic 10, Mar.1982:34-36
31 Elkin, P. K., The University Novel, Times Higher Education Supplement, 24.Dec:1976
32 Flandrau, C. M., *Harvard Episodes*, 1897
33 Quinton, A. M., Oxford in Fiction, Oxford Magazine 76(9),Jan. 23 1958:212-218
34 Schellenberger, J., University Fiction and the University Crisis, Critical Quarterly 24(3), 1982:45-48
35 Mobsbawm, P., University Life in English Fiction, Twentieth Century 173,1964Summer
36 Tierney, William G., Academic Freedom and Tenure: Between Fiction and Reality, Journal of Higher Education(Ohio) 75, 2004:161-177

なお、このリストには一部ヨーロッパに関するものも含まれている。

学術論文の掲載誌を見れば、高等教育関係のものもあれば、文学関係のものもある。各大学の同窓生向けと思われるものも散見される。著者については、すべてを調べているわけではないが、文学関係と社会学関係の人がいることは判明している。このリストからだけでも、アメリカではそれ相応にカレッジノベルが検討の俎上に上っていることが見て取れる。

次号からは、これらのうちのいくつかについて具体的な内容に触れていくことにしたい。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（17）

― 法政大学史センター ―

田中（たなか）　智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

今号では法政大学史センターを取り上げる。同センターは2013年に発足した比較的新しい大学アーカイブズである。以下、その基本情報および所蔵資料について述べていく。

（1）基本情報

法政大学史センターは、法政大学市ヶ谷キャンパス一口坂校舎内にある。その沿革は1980年に『法政大学百年史』が刊行された後、継続的に法政大学史を調査・研究するための組織として「法政大学大学史資料委員会」が設置されたことに始まる。同委員会設置後、その事務局として専門的に法政大学史の調査・研究を担当する職員が配置され、通称で「法政大学大学史編纂室」と呼ばれた。編纂室の業務は、法政大学史に関する基礎的な資料を集成した『法政大学史資料集』の編纂が中心であった。転機が訪れたのは2011年、自校教育「法政学への招待」が始まり、学内外で法政大学史への関心が高まったこともあり、大学史関連組織の再編が開始された。2012年6月、「法政大学大学史資料委員会」は「法政大学史委員会」と名称を改め、自校教育との連携及び大学所蔵品の公開展示といった事業を行う機能を強化した。編纂室についても2013年4月、名称を「法政大学史センター」に変更し、正式名称とした。これによって「法政大学史センター」は、これまでの大学史資料集編纂事業のみならず、公開展示などの事業を行う機関として、新たなスタートを切ったのである[1]。

同センターの事業は、「法政大学史委員会規則」によると、（1）法政大学

史に関する資料集の編集、(2)法政大学史関連資料の調査・収集・整理・保存、(3)法政大学史に関する研究活動及び関連の研究活動と連携、(4)法政大学史に関連する事業に関する総長の諮問への対応、(5)自校教育及び他の教育課程、研究所等との連携による教育活動へ協力、(6)法政大学史関連資料及び大学所蔵品の公開展示である[2]。ここに規定されている通り、現在のところ公開は展示のみで、一般の閲覧利用は行っていない。しかし、研究利用に限っては相談に応じるとのことであるので、まずは後述する連絡先に問い合わせてみるとよい。

(2)資料紹介

【写真１】「校友ニ関スル書類」綴

同センター所蔵資料のうち、筆者が紹介したいのは以下の2点である。1点目は「校友ニ関スル書類」綴である。【写真1】の通り、かなり厚みのある簿冊であるが、明治期の校友関係の書類綴りである。時期としてはちょうど和仏法律学校から専門学校令による法政大学が誕生する頃のもので、当時の校長(後に総理)の梅謙次郎が校友に対して様々な協力を求めている様子がわかる大変貴重な資料である。

2点目は、「大日本滑空工業専門学校資料」群である。大日本滑空工業専

門学校とは、戦時中の1944年6月に現在の茨城県石岡市に開校した日本初の滑空専門学校である。受験資格は中等学校4年修了以上で、定員50名に対して439名の受験者が集まったが、敗戦によりわずか1年余りで閉校した[3]。閉校後は財団法人筑波学園経営の筑波工業専門学校・筑波中学校となり、1948年には法政大学に吸収合併され、法政大学予科石岡分校・法

政大学第三中学校となった。当該資料群は、戦時体制下で設置された学校の新制移行の内実を知ることのできる、大変貴重な資料群である。【写真2】にその一部を掲載しておいたが、許認可関係や学科目配当など、様々な文書が残されている。

【写真２】「大日本滑空工業専門学校資料」群（一部）

（3）資料へのアクセス方法

（1）で述べた通り、法政大学史センターは現在のところ一般の資料閲覧は受け付けていないが、研究利用に限っては相談に応じるとのことであるので、まずは問い合わせてみてほしい。連絡先は下記の通りであるが、メールで問い合わせていただくほうがよいとのことである。

TEL：03-3264-6501

FAX：03-3264-6504

E-MAIL：daigakushi@hosei.ac.jp

また、同センター所蔵資料の一部は展示にて公開されている。市ヶ谷キャンパス外濠校舎6階に同センターの展示スペースがあり、そこで常設展・企画展を開催している【写真3】。4月22日までは法政大学・明治大学・関西大学三大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」[4]が開催されているので、ぜひこの機会に展示室を訪れてほしい。

さらに、2020年3月には、大学史を軸としたミュージアム（HOSEIミュージアム）が開設される予定である。法政大学史センターの今後の発展に期待したい。

（つづく）

1 法政大学史センターHP「法政大学史センターについて」（http://daigakushi.ws.hosei.ac.jp/aboutcenter.html）

2 「法政大学史委員会規則」第2条

3 石岡市立ふるさと歴史館第15回企画展「少年・少女がみた戦争」展示解説書（ http://www.city.ishioka.lg.jp/jgcms/admin68311/data/doc/1533253972_doc_191_0.pdf）

4 法政大学史センターHP「お知らせ」（http://daigakushi.ws.hosei.ac.jp/sanndaigaku201902.html）

【写真3】法政大学外濠校舎6階展示室

【写真4】特別展示「ボアソナードとその教え子たち」

「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（4）

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

前号では、「カリキュラム・マネジメント」の中心部分であるカリキュラム評価を体験的に学ぶ取り組みとして、前年度「教育課程・方法論A（冨岡）」授業評価アンケートを素材として分析する授業を試みたことを述べた。

本号では、前年度の授業評価アンケートをもとに「資料から前年度の「教育課程・方法論A（冨岡）」で実現できたと考えられる点」について、学生たちが少人数で話し合いながらまとめた意見を紹介する。前号でも述べたように、「○（実現できていたと考えられる点）」と「△（課題であったと考えられる点）」を、必ず一人二つずつ意見を出すように求めた。

「○（実現できていたと考えられる点）」

「○（実現できていたと考えられる点）」について学生がまとめた意見には、例えば以下のような、授業の分かりやすさや取り組みやすさについて言及したものが多かった。

> 「教員は授業の準備を十分にしていましたか」という質問に対し、81.4%の生徒が4以上の評価をしていることから授業の準備はよくできていたと考えられる。（意見A）
>
> フィードバックがしっかり活かされている点。評価理由欄からも見てとれるように、自分と他人の意見から学んだことが多かったと話す人も多いため。（意見B）
>
> 宿題レポート、班発表、定期試験に代わるレポートを全て連動させることで受講者の負担を減らしていること（設問13の結果からも分かる）。（意見C）
>
> 自分で考えることにに加え、他学部の人など周りとの交流を通して発表に持って行くという点。（意見D）

授業の進め方については分かりやすいとの意見が多数あり、学生の勉強しやすい環境づくり。（意見E）

「△（課題であったと考えた点）

一方、「△（課題であったと考えた点）」には、例えば以下のように、レポートの書き方が分かりにくい点や、話合い活動の工夫の不足を、指摘した意見が多く見られた。

レポートを取り入れる点は良い部分であるが、書き方などが十分に伝わっていなかった所。（意見F）

宿題レポートの指導案の書き方の説明が不十分（今年度の授業でも感じた）。⇒意欲的に取り組めない。何を書けばいいのかわからない。⇒もっと詳しく、わかりやすく説明する必要性有り。（意見G）

話し合いの回数が多いのは周りの意見を聞けて新たな発見にもつながるが、飽きるようにも感じられるので、話し合いを入れる時間を間にも〔授業の最後だけでなく授業の途中にも〕入れる等すると、変化があり良いのではないか。（意見H）

『授業に刺激され授業内容に興味を持つようになりましたか』という質問に対する評価が低いことから、授業を生徒の興味につなげることが出来ていないと考えられる。（意見I）

授業を担当している筆者にとっては、大変厳しい意見もあったが、記名式のミニッツペーパーであったにも関わらず、よくぞ厳しい意見を書いてくれたと思った。「カリキュラム評価について一緒に考えるに前年度アンケート結果を分析してほしい」ことを繰り返し強調していたためか、冷静な筆致の意見が多かった。

今回の授業でカリキュラム評価を体験した学生たちは、カリキュラム・マネジメントについてどのように考えたのだろうか。授業の最後に「カリキュラム・マネジメントの意義や在り方について改めて考えたこと」というテーマで学生たちがまとめた意見を次号で紹介したい。

我流・文献紹介(12)　―中高連の「要望書」、審議会の「改善答申」「高校指導要領改正」について―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

前回述べた通り、日本私立中学高等学校連合会は1967年夏から冬にかけて箱根町、仙台市、八王子市、出雲市で都合4回の研究集会を開き、68年3月22日、「高等学校教育課程改訂に関する要望書」を灘尾文部大臣に提出した。この要望書は文部大臣に提出する前から各方面の注目を集め、日本教育新聞と読売新聞はこれを大きくとりあげた。そしてこの要望書作成の中心人物たる中島保俊研究会委員長は“時の人”として日本教育新聞や朝日新聞によってクローズアップされたのである。68年4月、第11回教育課程審議会(会長・木下一雄東京学芸大学学長)がはじまると文部大臣は日本私立中学高校連合会の代表として連合会会長の棚橋勝太郎(郁文館高校長)と中島保俊(成女高校長)を審議会委員に任命した。審議会の高等学校分科会会長・三輪知雄(東京教育大学長)はしばしば中島保俊委員を指名して要望書を説明させた。それほど「要望書」は教育専門家の耳目を引いたのである。

「要望書」の最初の試案は私(神辺)がつくったので前に述べたが、「要望書」は4回の研究集会のたびごとに修正、書き直しをしている。その最終の「要望書」、即ち文部大臣に提出した「要望書」正文を記しておこう。ただし前文や微細の説明文は略し、要望事項のみとする。

基本的要望事項

1.学習指導要領の拘束性を弱めるべきである。

2.学習指導要領に示される学習内容はミニマムエッセンシャルズ(最低必要の質と量)でなければならぬ。

3.教科書使用の規制を緩和すべきである。

4.教員免許状をもたない者も一定割合の範囲内で教員として採用する措置を認めるべきである。

5.学校長の権限を拡大すべきである。

具体的要望事項

1.卒業の認定に必要な条件は次のように変更すべきである。

学校長が生徒の卒業を認定する場合(高等学校の全課程の修了の認定)その学校が定めた教育課程(「教科科目」「特別教育活動」「学校行事等」)の「修得」または「履修」を認定し、その単位数は「85単位以上」とする。

2.現行の高等学校学習指導要領は必修の「教科科目」とその「単位数」が多すぎるので、これを少なくすべきである。(具体例略)

3.学科の特質、学校や地域の事情などにより、各高等学校が独自に定めることができる「教科科目」の範囲を拡大すべきである。

4.科目の「A B2分割」を撤廃すべきである。

5.中学校・高等学校の一貫教育をおこなっている学校に対しては両学習指導要領に示された趣旨に沿って「独自の教育課程を編成する自由」を認めるべきである。

6.科目履修の代替の範囲を拡大すべきである。

7.時代の要請に応じた「専門教育を主とする学科」についてはその新設の認可を容易にすべきである。

教育課程審議会において私立中高連提出の要望書は注目された。審議委員の一人、清水義弘東大教授は“要望書は生徒の能力の面を中心に考えられている所がよい”と讃同した。審議会は特別部会(部会長・東京芸術大学学長・小塚新一郎)を設けて“高等学校教育課程の改善”に関する答申を行うことにし、委員10名と教育課程を各部にわたって専門的に調査する協力者341名を委嘱した。委員の中には私学代表の中島保俊が在り、私(神辺)も協力者の一人に委嘱された。この委員・協力者の協力でまとめたものが69年3月の「高等学校教育課程改善の中間まとめ」であり、同年9月にでた坂田文部大臣への答申「高等学校教育課程の改善について」である。

この答申は教育課程の方針転換から教科科目・単位のすみずみまで詳細に述べているので方針転換の要点だけ述べよう。

答申「改善について」は、私学の「要望書」に倣って「基本方針」と「具体方針」について述べている。「基本方針」ではごく当然な高校生のあり方を3項述べたあと、高校の教育内容が多すぎるから教科科目の内容を精選すべきである（第4項）。選択科目にじゅうぶんな単位をあてたり、教科外の教育活動時間を与えられるようにすべきである（第5項）と提言している。まさに私学の「要望書」の本旨が受け入れられたのである。

「具体的方針」では各教科科目を精選すべきことを各教科科目ごとに述べているが割愛する。目を引くのは「教科以外の教育活動」の項で“クラブ活動の充実発展”を強調したことである。中高連の「要望書」は、卒業認定の條件中に教科科目以外の特別教育活動の履修を加えるという提言はしたが、教育課程審議会がこれほどクラブ活動の教育上の効力を評価するとは思わなかった。審議会の「改善について」は言う。「教科以外の教育活動が各教科科目とあいまって……生徒の人間形成に果たす役割の重要性にかんがみ……その内容の充実・改善を図ること」。そして「クラブ活動については個性の伸長、情操の陶冶、協力の精神の涵養および心身の健全な発展を図る

とともに友情を深め、学校生活をより豊かにする見地からそのいっそうの充実発展が図られるようにすること」とし「すべての生徒にクラブ活動の経験を得させるようにするとともに、これにあてる時間が確保できるように配慮すること」とクラブ活動の必修を暗示した。

1970年5月6日、文部省は「高等学校学習指導要領案」を公表、同年10月15日、「学校教育法施行規則」の一部を改正し、同時に高等学校の新しい学習指導要領を告示した。これは旧来の高等学校学習指導要領の一部改正でなく、新しい学習指導要領であるとの文部省の趣旨から出したものである。実施は73年度の一年生から学年進行により実施とされた。

新高等学校学習指導要領の特徴は①必修の教科科目の種類と単位数を大幅に削減したことと、②クラブ活動を必修にしたことである。全日制普通科の必修教科科目は男子11～12科目、女子12～13科目となり、単位数は男子43単位、女子47単位となった。必修が減った分だけ、各学校は独自の必修または選択の教科科目をつくれるのである。クラブ活動は“各学年週当り1単位時間を下らないように履修させる”となっているから全生徒が全学年を通して実質3単位以上のクラブ活動を行うようになる。こうして1973年から通称“部活”の教育が全国の中学高校で始ったのである。

月刊ニューズレター
『現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
総目次（第1号～第50号）

雨宮（あめみや）　和輝（かずき）（早稲田大学）

※氏名の横の数字は頁数

〈第 1 号〉
逸話と世評で綴る女子教育史（1）20 世紀開幕・女子大生の登場／神辺　靖光 2
明治 21 年の帝国大学評議会より／谷本　宗生 5
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　—立教大学庶務課文書—（1）／田中　智子 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（1）—「受験」を語ることの意味（1）—／吉野　剛弘 11
近代日本における大学予備教育の研究① —私立大学予科に着目して—／山本　剛 14
旧制中学校校友会研究はなぜ重要か／堤　ひろゆき 20
白線帽から見えること／金澤冬樹 22
日記資料群からみる青年知識層の生活と自己形成／田中祐介 25
八戸南部氏第 12 代南部利克の進路選択／小宮山道夫 29
木下広次と一高歴史画（1）／冨岡　勝 33
投稿募集「現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて」のコラム記事企画について／小宮山　道夫 37
刊行要項（2015 年 1 月 15 日現在）38
編集後記 40

〈第 2 号〉
コラム　秋季入学／小宮山　道夫 2
逸話と世評で綴る女子教育史（2）　学芸会と運動会／神辺　靖光 4
現代の大学をめぐる状況をいかに考えるか／谷本　宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第 2 回　はじめに：「受験」を語ることの意味（2）／吉野　剛弘 9
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料—立教大学庶務課文書—（2）／田中　智子 12
近代日本における大学予備教育の研究② —私立大学における大学予科設置—／山本　剛 15
「私は帝国大学ではありません」—多様な「大学予備教育」の姿—／金澤　冬樹 19
新制大学の生態誌(1)　—新制大学発足期の大学生のアルバイト事情—／井上　美香子 23
個別の学校史研究の射程についてのアイデア／堤ひろゆき 25
戦時下の少女の日記と教員の叱責（1）／田中祐介 28
青森県立図書館所蔵「県会関係　決議録　三」(郷土 318.4A)にみる高等中学校関連経費の予算追加記録／小宮山道夫 33
木下広次と一高歴史画（2）／冨岡　勝 35
刊行要項（2015 年 2 月 15 日現在）39
編集後記 40

〈第 3 号〉
コラム　学生寮が注目されつつある／冨岡　勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（3）　東京の英語女学生／神辺　靖光 4
軍学共同、デュアル・ユース研究の狭間で自問自省する大学／谷本　宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第3回　新制高等学校の補習科・専攻科とは／吉野　剛弘 10
新制大学の生態誌(2)　—逞しい学生達—／井上　美香子 13
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—敗戦直後の学生の生活費とアルバイト—／田中　智子 16

〈第 4 号〉
コラム　新学期の始まりであれこれ思うこと／谷本　宗生 2
逸話と世評で綴る女子教育史（4）　奥村喜三郎の「女学校発起之趣意書」／神辺　靖光 6
まち・ひと・しごとを想う　一明治 20 年代の本郷弓町 2 丁目から—／谷本　宗生 9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第4回　補習科・専攻科の類型化／吉野　剛弘 11
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—立教高等学校における寄宿寮の理念と実態—／田中　智子 14
新制大学の生態誌(3)　—新制大学草創期の女子

火鉢のある古本屋　　ー予科学生の読書風景ー／金澤　冬樹 20
近代日本における大学予備教育の研究③　　—早稲田大学の大学予科設置構想に注目して—／山本　剛 23
中学校生徒による「先輩」像の描き方／堤　ひろゆき 28
戦時下の少女の日記と教員の叱責（2）／田中　祐介 33
『明治十七年度 青森県会議按』（内閣文庫）にみる青森県の中等教育再編／小宮山道夫 37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか 1934 年の松本中学の場合（1）／冨岡　勝 41
刊行要項（2015 年 2 月 15 日現在）46
編集後記 47
学生たち—／井上　美香子 17
近代日本における大学予備教育の研究④　—高等学院(早稲田大学)の学科課程に着目して—／山本　剛 20
学校報国団による「伝統」の変化／堤　ひろゆき 23
貫く棒の如きもの　　—私学における「予科」の系譜／金澤　冬樹 26
日本軍の日記文化とその教育史的背景に関する覚え書き／田中　祐介 31
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか 1934 年の松本中学の場合（2）／冨岡　勝 34
青森県の中等教育再編と専門学校の廃止／小宮山道夫 37
第1回執筆者交流会記録（前半）／井上　美香子 41
第1回執筆者交流会記録（後半）／堤　ひろゆき 43
刊行要項（2015 年 2 月 15 日現在）46
編集後記 47

〈第 5 号〉

コラム　受験のためではない学びとは／和崎　光太郎 2
逸話と世評で綴る女子教育史（5）　吉田松陰の女学校／神辺　靖光 6
第一高等中学校で「唱歌」教育が行われたことを教育史的に　捉えておこう！ —鳥居忱（体操軍歌）から鈴木米次郎（唱歌）へ—／谷本　宗生 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第 5 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科（1）：福岡県（1）／吉野　剛弘 13
大学史研究から高等教育史研究へ／松嶋　哲哉 16
新制大学の生態誌(4)　—大学生の恋愛事情—／井上　美香子 20
近代日本における大学予備教育の研究⑤　—大学(学部)と大学予科との関係に着目して—／山本　剛 23
「充分なる信用」　—学生寮再興の時代に—　／金澤　冬樹 28
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—女子学生の受け入れと女子寮建設 —／田中　智子 31
青森県（弘前）からの東京遊学旅程／小宮山道夫 35
「指導者」としての上級生（1）／堤　ひろゆき 39
学徒兵の『軍隊日誌』にみる部隊長訓示／田中　祐介 42
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（3）—1914 年の松本中学卒業生の自治論 —／冨岡　勝 44
刊行要項（2015 年 2 月 15 日現在）47
編集後記 48

〈第 6 号〉

コラム　18歳選挙権と生徒会史研究／冨岡　勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（6）　節婦烈女と薙刀／神辺　靖光 4
青年寺田寅彦とヴァイオリンのかかわりについて／谷本　宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第6回　学校沿革史にみる補習科・専攻科（2）：福岡県（2）／吉野　剛弘 11
近代日本における大学予備教育の研究⑥　　—慶應義塾大学予科における女性の門戸開放計画—／山本　剛 14
「指導者」としての上級生（2）／堤　ひろゆき 17
寮歌は誰のものか　—「学生文化」の伝播と抵抗—／金澤　冬樹 20
大学史研究から高等教育史研究へ（承前）／松嶋　哲哉 23
新制大学の生態誌(5)　ー「体育」からみる女子学生像ー／井上　美香子 25
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—『立教大学新聞』にみる学生運動—／田中　智子 29
『岩手学事彙報』について／小宮山道夫 33
『軍隊日誌』に刻まれた学徒兵の体調悪化と日誌の途絶／田中　祐介 35
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（4）—1903 年の松本中学『校友』編集委員の言説—／冨岡　勝 38
刊行要項（2015 年 2 月 15 日現在）40
編集後記 42

〈第 7 号〉

〈第 8 号〉

コラム　18歳選挙権と生徒会史研究（2）／田中智子 2
逸話と世評で綴る女子教育史（7）　豊岡藩と福山藩の女学校／神辺　靖光 4
現代の新しい教育機運と歴史の教訓との関係性について／谷本　宗生 6
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第 7 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科（3）：福岡県（3）／吉野　剛弘 10
「指導者」としての上級生（3）／堤　ひろゆき 13
近代日本における大学予備教育の研究⑦　　—慶応義塾大学予科の学科課程—／山本　剛 16
「外国語の空間」　—私立大学予科における外国語教育—／金澤　冬樹 18
新制大学の生態誌(6)　ー新制大学と戦争・平和〔序〕ー／井上　美香子 22
帝国大学の中の専門学校　—北海道帝国大学の専門部の成立～廃止まで—／松嶋　哲哉 24
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—『立教大学新聞』にみる学生運動（2）—／田中智子 29
『岩手学事彙報』初期の記事項目について／小宮山道夫 32
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（5）—1903 年の松本中学『校友』編集委員の言説（その 2）—／冨岡　勝 34
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）37
旧制高等学校記念館第 20 回夏期教育セミナーご案内等 38
編集後記 40
コラム　キャンパスは語る　九州大学と箱崎キャンパス／井上　美香子 2
逸話と世評で綴る女子教育史（8）　松江藩と岩国藩の女学校／神辺　靖光 5
人はいかにして、人たり得るのか！—さだまさし@自伝小説及び山本義隆@青年訓などから—／谷本　宗生 8
新制大学の生態誌(7)　ー新制大学と戦争・平和〔1〕／井上　美香子 13
近代日本における大学予備教育の研究⑧　—慶応義塾大学の大学予備教育の理念—／山本　剛 18
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第 8 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科(4)：福岡県(4)／吉野　剛弘 22
帝国大学の中の専門学校　ー北海道帝国大学専門部の教育内容ー／松嶋　哲哉 27
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—『立教大学新聞』にみる学生運動（3）—／田中智子 32
「全く違った学校」—学部と予科を分かつもの／—金澤　冬樹 36
旧制中学校における校長とスポーツ／堤　ひろゆき 40
恐れず、怠ることなく日記をつづれ　　—学徒兵の『軍隊日誌』にみる点検指導と軍人精神—／田中　祐介 44
『岩手学事彙報』の森有礼関連記事／小宮山道夫 52
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（6）—相談会に対する小林有也校長の指導—／冨岡勝 55
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）57
編集後記 58
〈第 9 号〉
コラム　捨てたもんじゃない！社会にある小さな心遣い／谷本　宗生 2
逸話と世評で綴る女子教育史（9）　黒田清隆の女子教育論と女子留学生／神辺　靖光 7
人はいかにして、人たり得るのか！（その II）　—作家文人・タレント・俳優の回顧談（上京物語）から—／谷本　宗生 10
大阪市の女子教育①　女子教育と家政学　　ー大阪市立大学生活科学部に着目してー／徳山　倫子 16
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第9回　学校沿革史にみる補習科・専攻科(5)：福岡県(5)／吉野　剛弘 20
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　　—『立教大学新聞』にみる学生運動（4）ー／田中智子 23
近代日本における大学予備教育の研究⑨　　—東京商科大学の学科課程に注目して—／山本
〈第 10 号〉
コラム　60 年安保闘争から現代の安保関連法案について考える／田中　智子 2
逸話と世評で綴る女子教育史（10）日本人少女のアメリカ留学／神辺　靖光 4
人はいかにして、人たり得るのか！（その III）　—タレント・宇宙飛行士・作家の回顧談から—／谷本宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　　第 10 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科(6)：福岡県(6)／吉野　剛弘 12
大阪市の女子教育②　　ー大阪府における女子教育の概要・その1ー／徳山　倫子 14
近代日本における大学予備教育の研究⑩　　—東京商科大学の「籠城事件」に注目してー／山本剛 18
帝国大学の中の専門学校　—東京帝国大学農科大学実科の沿革—／松嶋　哲哉 23
「学生寮の時代」①　—学生寮研究に向けて—／

剛 26
旧制中学校生徒の伝統とスポーツ／堤　ひろゆき 30
旧制高等学校記念館第 20 回夏期教育セミナー開催報告／金澤冬樹 35
帝国大学の中の専門学校　—北海道帝国大学と専門部の卒業後進路—／松嶋哲哉 38
新制大学の生態誌(8)　－新制大学と戦争・平和〔2〕／井上　美香子 43
『岩手学事彙報』中の東北地区での森有礼演説記事／小宮山道夫 46
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（7）—相談会に対する小林有也校長の指導（その2）—／冨岡　勝 51
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）54
編集後記 55

金澤　冬樹 26
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　—『立教大学新聞』にみる学生運動（5）—／田中智子 30
新制大学の生態誌(9)　－新制大学と戦争・平和〔3〕－／井上美香子 34
長野県松本中学校「相談会」の意志決定／堤ひろゆき 36
『岩手学事彙報』森有礼演説に関する寄書／小宮山道夫 39
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（8）—相談会に対する小林有也校長の指導（その 3）—／冨岡　勝 42
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）45
編集後記 46

〈第 11 号〉

コラム　東京大学駒場博物館の狩野亨吉展
一学内史資料を駆使した展示の試み一／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（11）　—北海道開拓者の妻を養成する開拓使女学校—／神辺　靖光 4
人はいかにして、人たり得るのか!（その IV）　—棋士・レスラー・俳優の回顧談から—／谷本　宗生 7
大阪市の女子教育⑨　－大阪府における女子教育の概要・その2－／徳山　倫子 13
近代日本における大学予備教育の研究⑩　—東京商科大学予科と旧制高校の学科課程—／山本　剛 17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　第 11 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科(7)：島根県(1)／吉野　剛弘 22
活版印刷以前の校内雑誌／堤　ひろゆき 25
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　—『立教大学新聞』にみる学生運動（6）—／田中智子 29
帝国大学の中の専門学校　—東北帝国大学工学専門部、九州帝国大学附属工業専門部—／松嶋哲哉 31
新制大学の生態誌(10)　－新制大学と戦争・平和〔4〕－／井上美香子 35
「学生寮の時代」②　—裾野の広い先行研究—／金澤冬樹 37『岩手学事彙報』にみる奥羽各県尋常中学校生徒の比較試業／小宮山道夫 42
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（9）—東京府尋常中学校長 勝浦鞆雄の校友会活動観（その1）—／冨岡　勝 45
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）48
編集後記 49

〈第 12 号〉

コラム　長崎女子短期大学の学友自治会選挙から思うこと／山本　尚史 2
逸話と世評で綴る女子教育史（12）政府・新聞合流の東京女学校開設記事／神辺　靖光 4
現代にいまだ残る女性への根強い偏見に対して思うこと／谷本　宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　第 12 回　学校沿革史にみる補習科・専攻科(8)：島根県(2)／吉野　剛弘 10
大阪市の女子教育⑩－大阪府における女子教育の概要・その3－／徳山　倫子 14
近代日本における大学予備教育の研究⑪　—神戸商業大学の入学者—／山本　剛 18
回想にみる東京帝国大学農科大学（学部）実科／松嶋　哲哉 24
新制大学の生態誌（11）　－新制大学と戦争・平和〔5〕－／井上　美香子 27
「学生寮の時代」③　—「遊学案内」に見る下宿事情—／金澤　冬樹 30
校友の動静を報じるということ／堤ひろゆき 34
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料　—『立教大学新聞』にみる学生運動（7）—／田中智子 37
志賀覚治「普通教育と高等教育の連絡」にみる明治 20 年代教育界の問題／小宮山道夫 40
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（10）　—東京府尋常中学校長 勝浦鞆雄の校友会活動観(その2)—／冨岡　勝 43
第 2 回執筆者交流会記録（前半）／金澤　冬樹 48
第 2 回執筆者交流会記録（後半）／山本　剛 50
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）53
編集後記 54

〈第 13 号〉

コラム 貴人の巡廻 ／小宮山 道夫 2

〈第 14 号〉

コラム　入試の季節に思う／吉野 剛弘 2

逸話と世評で綴る女子教育史（13）　官立東京女学校の斬新さ／神辺 靖光 4
私が何気に読んでいる本、あれこれ　—私にとっての学びとはなんだろう—／ 谷本 宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道　第 13 回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(9)：島根県(3)／吉野 剛弘 13
近代日本における大学予備教育の研究⑬　—神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議①— ／山本 剛 16
「学生寮の時代」④ —江戸時代の「学生寮」— ／金澤 冬樹 20
2 つの報道写真／松嶋　哲哉 26
新制大学の生態誌（12）－新制大学と戦争・平和〔6〕－ ／井上 美香子 32
青年志賀覚治の上京と徴兵／小宮山 道夫 36
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（11）—東京府　　尋常中学校長 勝浦鞆雄の校友会活動観(その 3)— ／冨岡 勝 41
ニューズレター2015 アワード発表！／ 小宮山 道夫 44
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在） 49
編集後記 50

逸話と世評で綴る女子教育史(14)　竹橋女学校の教育／神辺 靖光 5
学問教育の奥行き、すそ野についていろいろ思いを寄せて —大学で学ぶことの可能性とはなんだろう— ／谷本 宗生 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（14）学校沿革史にみる補習科・専攻科（10）：島根県（4）／吉野 剛弘 12
近代日本における大学予備教育の研究⑭ —神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議②— ／山本 剛 15
学生寮の時代⑤ —学生はどこに住んでいたか— ／金澤 冬樹 19
東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動 —帝国議会への請願運動①— ／松嶋　哲哉 24
戦前期日本の女子高等教育の教育理念及び教育内容① 19
世紀アメリカ東部の女子大学との比較 ／ママトクロヴァ・ニルファル 28
大阪市の女子教育⑤ —西区女子手芸学校の設立— ／徳山 倫子 33
福島県尋常中学校第一期生の卒後（上）／小宮山 道夫 36
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（12）—東京府尋常中学校長 勝浦鞆雄の校友会活動観(その 4)— ／冨岡 勝 39
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在） 42
編集後記 43

〈第 15 号〉

コラム 長崎県立農学校卒業生 内田牛一について ／山本 尚史 2
逸話と世評で綴る女子教育史(15)　ヘボン家塾からフェリス女学院と明治学院が生まれる ／神辺 靖光 4
私の読書ノート、つれづれ —学びの本質を考えよう—／ 谷本 宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（15）学校沿革史にみる補習科・専攻科（11）：島根県（5）／吉野 剛弘 10
近代日本における大学予備教育の研究⑮ —神戸商業大学の大学予科設置をめぐる論議③—／ 山本 剛 14
大阪市の女子教育⑥ —西区女子手芸学校の授業科目—／ 徳山 倫子 17
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容② 創設者の高等教育思想にみるアメリカの影響／ ママトクロヴァ・ニルファル 21
東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動 —帝国議会への請願運動②—／ 松嶋　哲哉 27
学生寮の時代⑥ — 宮沢賢治と寮生活—／ 金澤 冬樹 32
福島県尋常中学校第一期生の卒後（下）／小宮山 道夫 35

〈第 16 号〉

コラム 日本国憲法第 26 条／ 和崎 光太郎 2
逸話と世評で綴る女子教育史（16）メリーキダーと大江卓の巡り合いが“キダーさんの女学校”をつくる ／神辺 靖光 5
大阪市の女子教育⑦ —西区女子手芸学校の生徒— ／徳山 倫子 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（16）学校沿革史にみる補習科・専攻科（12）：島根県（6）／吉野 剛弘 11
正岡子規と夏目漱石の展示をみて思うこと —松山@坂の上の雲ミュージアムと神奈川近代文学館— ／谷本 宗生 14
近代日本における大学予備教育の研究⑯ —神戸商業大学の大学予科設置運動①—／ 山本 剛 16
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容③ 女子英学塾の教育理念／ママトクロヴァ・ニルファル 19
「学生寮の時代」⑦ —大正時代の寄宿舎研究— ／金澤 冬樹 24
東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動 —帝国議会への請願運動③—／ 松嶋 哲哉 28
どんなことが「自治ではない」とみなされたの（14）—東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 2)—／冨岡 勝 32

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（13）—東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 1)—／冨岡 勝 38
コラム 広島県の中3受験生自殺事件について感想あり／ 神辺 靖光 41
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在） 44
編集後記 45
アクティブ・ラーニングに思う ／小宮山 道夫 35
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在） 38
編集後記 39

〈第 17 号〉
コラム寄宿舎の過去と現在をどのように研究できるか／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史(17)　フェリス・セミナリー開校／神辺靖光 4
私の読書ノート、つれづれ2—学びの姿を追い求めて—／谷本宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（17）学校沿革史にみる補習科・専攻科（13）：島根県（7）／吉野剛弘 11
近代日本における大学予備教育の研究⑰－神戸商業大学予科設置趣意書－／山本剛 15
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容④女子英学塾の教育内容①／ママトクロヴァ・ニルファル 20
東京帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動—予算計上までの紆余曲折—／松嶋哲哉 26
学生寮の時代⑧—中等教育の寄宿舎—金澤冬樹 30
大阪市の女子教育⑧—義務教育修了後の女子の進路と西区女子手芸学校—／徳山倫子 35
福島県尋常中学校の校友会兼販売雑誌『扶桑の花』について／小宮山道夫 37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（15）—東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 3)—／冨岡勝 39
お知らせ旧制高等学校記念館夏期教育セミナー告知／金澤冬樹 42
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）43
編集後記 44
〈第 18 号〉
コラム「佐藤秀夫文庫」／松嶋哲哉 2
逸話と世評で綴る女子教育史（18）　A6 番女学校とカロザース夫人／神辺靖光 5
私の読書ノート、つれづれ3—本との出会いを求めて—／谷本宗生 8
近代日本における大学予備教育の研究⑱－神戸商業大学予科の学科課程－／山本剛 11
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（18）学校沿革史にみる補習科・専攻科（14）：鳥取県（1）／吉野剛弘 15
大阪市の女子教育⑨—西区女子手芸学校と府立高等女学校の比較—／徳山倫子 20
東帝国大学農科大学（学部）実科の独立運動—校長問題と教官問題—／松嶋哲哉 24
学生寮の時代⑨－正岡子規と「県人寮」－／金澤冬樹 28
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑤女子英学塾の教育内容②／ママトクロヴァ・ニルファル 33
福島県尋常中学校の出京病について／小宮山道夫 37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（16）—東京府尋常中学学友会雑誌にみる生徒の言説(その 4)—／冨岡勝 42
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）45
編集後記 46
〈第 19 号〉
コラム教育実践の吐露－子どもにとっての不幸とは－／和崎光太郎 2
逸話と世評で綴る女子教育史（19）　B6 番女学校から新栄女学校へ／神辺靖光 5
私の読書ノート、つれづれ4
—本との出会いを求めて（続）—／谷本宗生 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（19）学校沿革史にみる補習科・専攻科（15）：鳥取県（2）／吉野剛弘 12
近代日本における大学予備教育の研究⑲－早稲田大学附属高等学院の特修科①－／山本剛 17
東京帝国大学実科の教育内容—学科課程の変遷—／松嶋哲哉 22
大阪市の女子教育⑩—大阪市立家政女学校の設置計画—／徳山倫子 27
〈第 20 号〉
コラム築 103 年目の学生寮の保存・活用をめぐって／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（20）　—原胤たね昭あきと原女学校—／神辺靖光 4
大泉学園都市、小平学園都市、国立学園都市—学園都市建設への飽くなき夢—／谷本宗生 7
近代日本における大学予備教育の研究⑳—早稲田大学附属高等学院の特修科②—／山本剛 9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（20）学校沿革史にみる補習科・専攻科（16）：島根県（8）・鳥取県(3)／吉野剛弘 14
大阪市の女子教育⑪—西区女子手芸学校の教育方針—／徳山倫子 19
東京帝国大学実科の教育内容—学科課程の変遷②—／松嶋哲哉 23

学生寮の時代⑧—下宿の研究—／金澤冬樹 30
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑦女子英学塾の寮生活／ママトクロヴァ・ニルファル 35
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（17）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 1)—／冨岡勝 40
《お知らせ・続報》旧制高等学校記念館第 21 回夏期教育セミナー／金澤冬樹 43
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）46
編集後記 47

学生寮の時代⑨—旧制中学の寄宿舎（寄宿舎にかかわる職員たち）—／金澤冬樹 28
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑧女子英学塾の宗教教育①／ママトクロヴァ・ニルファル 32
アクティブ・ラーニングに思う（承前）／小宮山道夫 36
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（18）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 2)—／冨岡勝 38
お知らせ　学際シンポジウム近代日本の日記文化と自己表象 41
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）46
編集後記 47

〈第 21 号〉
コラム labor と play を両立する教員と学校／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（21　）—芳英社女学校と水交女塾—／神辺靖光 4
医学士森林太郎の苦悩の始まり—千駄木@森鷗外記念館を訪れて—／谷本宗生 7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（21）学校沿革史にみる補習科・専攻科（17）：鳥取県（4）／吉野剛弘 9
近代日本における大学予備教育の研究㉑—早稲田大学附属高等学院の特修科③—／山本剛 13
戦前における「学生生活調査」に関する研究（1）／山本尚史 20
東京帝国大学実科の教育内容—学科課程の変遷③—／松嶋哲哉 23
大阪市の女子教育⑩—西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校へ—／徳山倫子 29
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑨—女子英学塾の宗教教育②—／ママトクロヴァ・ニルファル 33
学生寮の時代⑩—旧制中学の寄宿舎（生徒の生活空間）—／金澤冬樹 37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（19）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 3)—／冨岡勝 41
《開催報告》旧制高等学校記念館第 21 回夏期教育セミナー／金澤冬樹 43
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）46
編集後記 47

〈第 22 号〉
コラムつれづれ@読書の秋に相応しく古書目録談／谷本宗生 2
逸話と世評で綴る女子教育史（22）　女紅場の種類と勧業女工場メリヤス工場／神辺靖光 4
『大東文化大学報』創刊号を読んで—大学の事務広報誌から探る—／谷本宗生 7
大阪市の女子教育⑪—大阪市立高等西華女学校の学科課程と卒業生への特典—／徳山倫子 10
近代日本における大学予備教育の研究㉒—大学予科の修業年限立教大学①—／山本剛 14
学生寮の時代⑪—旧制中学の寄宿舎（精神面の強調と入舎の強制）—／金澤冬樹 19
戦前における「学生生活調査」に関する研究（2）学生生活調査の実施方法①東京帝国大学／山本尚史 24
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（22）学校沿革史にみる補習科・専攻科（18）：鳥取県（5）／吉野剛弘 27
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑩津田梅子による英語の出版物／ママトクロヴァ・ニルファル 31
東京高等農林学校の教育内容／松嶋哲哉 36
第二高等中学校在校生の進級実態について／小宮山道夫 40
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（20）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その4)—／冨岡勝 45
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）47
編集後記 48

〈第 23 号〉
コラム早朝の箱崎キャンパスを歩いて／山本尚史 2
逸話と世評で綴る女子教育史（23）　勧工女紅場と手芸の女紅場／神辺靖光 4
『大東文化大学報』（昭和 51 年版）を読んで—大学の事務広報誌から探る—／谷本宗生 7
大正期における宗教系私学の大学昇格①—仏教系私学とキリスト教系私学の大学昇格への動き—

〈第 24 号〉
コラム都市型大学のゆくえ—“都心回帰”に想う—／金澤冬樹 2
逸話と世評で綴る女子教育史（24）　京都府の新英学校及び女紅場／神辺靖光 5
東京帝国大学運動会『運動会報』5 号（1938 年）を読んで—剣道部の活動記述について—／谷本宗生 9
大正期における宗教系私学の大学昇格②—大学

／雨宮和輝 9
戦前における「学生生活調査」に関する研究（3）—学生生活調査の回収率東京帝国大学—／山本尚史 12
近代日本における大学予備教育の研究㉓—大学予科の学科課程立教大学②—／山本剛 14
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（23）学校沿革史にみる補習科・専攻科（19）：鳥取県（6）／吉野剛弘 17
学生寮の時代⑩—寄宿舎論の系譜—／金澤冬樹 20
東京帝国大学実科の教育内容—学科課程の変遷（補足）—／松嶋哲哉 23
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑩ 卒業生に向けた津田梅子のメッセージ／ママトクロヴァニルファル 27
明治前期福井県青年の扶助組織とその演説／小宮山道夫 31
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（21）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 5)—／冨岡勝 35
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）38
編集後記 39
令制定に際しての仏教系私学の態度について—／雨宮和輝 11
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（24）学校沿革史にみる補習科・専攻科（20）：鳥取県（7）／吉野剛弘 15
近代日本における大学予備教育の研究㉔—修業年限延長の予科立教大学③—／山本剛 21
大阪市の女子教育⑭—大阪市立高等西華女学校の授業科目—／徳山倫子 25
明治前期福井県青年の扶助組織とその演説（二）／小宮山道夫 29
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（22）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 6)—／冨岡勝 31
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）35
編集後記 36

〈第 25 号〉

コラム初年次教育は日本語教育／山本剛 2
逸話と世評で綴る女子教育史（25）　潤沢な資金でたてられた番組小学校と京都府中学／神辺靖光 4
教育学者@中嶋博の二松学舎での学校生活から—覚え書き「教育学研究への開眼」—／谷本宗生 7
大正期における宗教系私学の大学昇格②—キリスト教大学設置構想について—／雨宮和輝 9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（25）学校沿革史にみる補習科・専攻科（19）：鳥取県（8）／吉野剛弘 12
近代日本における大学予備教育の研究㉕—修業年限延長の予科東京慈恵会医科大学①—／山本剛 15
大阪市の女子教育⑮—大阪市立高等西華女学校における体育教育—／徳山倫子 18
戦前における「学生生活調査」に関する研究（4）—学生課・学生部について①—／山本尚史 21
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（23）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 7)—／冨岡勝 24
第 3 回執筆者交流会記録／雨宮和輝 26
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）30
編集後記 31

〈26 号〉

コラム外国人による日本評価と実情との狭間に道徳教育を思う／小宮山道夫 2
逸話と世評で綴る女子教育史（26）　京都府勧業政策の一環としての女紅場／神辺靖光 6
大東文化学院生@石川富男の日記から—1935 年の学院卒業を目前にして—／谷本宗生 9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（26）学校沿革史にみる補習科・専攻科（22）：鳥取県（9）／吉野剛弘 13
大正期における宗教系私学の大学昇格④—大正期における宗教系私学の評価—／雨宮和輝 15
近代日本における大学予備教育の研究(26)—修業年限延長の予科日本医科大学①—／山本剛 18
学生課・学生部について②『日本近代教育史事典』／山本尚史 22
学生寮の時代⑩—「徒労の奉公」？舎監の多忙と人材不足—／金澤冬樹 24
大阪市の女子教育⑯—活発な女学生への世間の目と生徒の自己意識—／徳山倫子 28
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（24）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その8)—／冨岡勝 33
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）35
編集後記 36

〈27 号〉

コラム山本剛氏のコラム「初年次教育は日本語教育」に感あり／神辺靖光 2
逸話と世評で綴る女子教育史（27）　京都府上京

〈28 号〉

リレー型コラム「投書欄」『大東文化大学新聞』創刊号（1956 年 4 月）を読んで痛感すること／谷本宗生 2

30 区・29 区の正貞女紅場／神辺靖光 4
1932 年6月の東京帝国大学文学部教育学科教授評判記—雑誌『東大文化』第2号の「クラスルーム」から—／谷本宗生 8
大正期における宗教系私学の大学昇格⑤—真宗大谷派の 2 つの教育機関に関する考察（1）—／雨宮和輝 10
学生課・学生部について③『九州大学五十年史通史』／山本尚史 14
近代日本における大学予備教育の研究(27)—予科の学科課程日本医科大学②—／山本剛 17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（27）学校沿革史にみる補習科・専攻科（23）：広島県（1）／吉野剛弘 22
学生寮の時代⑥—寄宿舎の「弊害」とは何か—／金澤冬樹 26
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（25）—東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その 9)—／冨岡勝 30
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）34
編集後記 35

コラム「離陸」のための「First-Year Experience」／金澤冬樹 4
逸話と世評で綴る女子教育史(28)　慶応義塾衣服仕立局と東京の普通女紅場／神辺靖光 7
関口穂太の戯詩「本学図書館」—文化雑誌『東大文化』創刊号（1932 年 5 月）から—／谷本宗生 10
大正期における宗教系私学の大学昇格⑥—真宗大谷派の 2 つの教育機関に関する考察（2）—／雨宮和輝 12
学生寮の時代⑦—寄宿舎教育「弊害」の「大々的原因」とは—／金澤冬樹 15
近代日本における大学予備教育の研究(28)—大学予科の二年制併置早稲田大学①—／山本剛 19
学生課・学生部について④『九州大学五十年史通史』『九州大学七十五年史通史』／山本尚史 22
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（28）学校沿革史にみる補習科・専攻科（24）：広島県（2）／吉野剛弘 24
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（1）—歴史学系学会・研究会による資料保存運動—／田中智子 27
教育における自治（1）重層性への注目／冨岡勝 30
明治前期福井県青年の扶助組織とその演説（三）／小宮山道夫 32
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）34
編集後記 35

〈29 号〉
コラム学科と教員免許との相等関係／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（29）　マリヤ・ルーズ号事件と娼芸妓解放令／神辺靖光 6
「部報」『なあべる』創刊号（1937 年 11 月）から—東京帝国大学医学部昭和十一年生らの動向—／谷本宗生 9
学生寮の時代⑧—寄宿舎生「監督」をいかに改善するか—／金澤冬樹 12
大正期における宗教系私学の大学昇格⑦—キリスト教系私学の拡張（1）—／雨宮和輝 16
学生課・学生部について⑤『東北大学五十年史上』／山本尚史 19
近代日本における大学予備教育の研究(29)—二年制の高等学院早稲田大学②—／山本剛 21
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（2）—国・地方自治体の公文書館と学校資料—／田中智子 26
明治前期福井県青年の扶助組織とその演説（四）／小宮山道夫 30
　お知らせ　旧制高等学校記念館「第 22 回夏期教育セミナー」告知／金澤冬樹 32
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）33
編集後記 34

〈30 号〉
コラム第 4 次産業革命と「大学改革」／松嶋哲哉 2
逸話と世評で綴る女子教育史（30）　京都祇園の女紅場と東京の千束村女紅場／神辺靖光 6
小説「九段の青春」（全 10 話）を読む—『大東文化』275～284 号（1976.4～1977.2）—／谷本宗生 10
大正期における宗教系私学の大学昇格⑧—キリスト教系私学の拡張（2）—／雨宮和輝 13
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（29）学校沿革史にみる補習科・専攻科（25）：広島県（3）／吉野剛弘 17
近代日本における大学予備教育の研究(30)—二年制の大学予科同志社大学①—／山本剛 20
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（3）—学校（大学）アーカイブズの概要および形態—／田中智子 23
教育における自治（2）石田雄『自治』を読む(1)／冨岡勝 28
明治前期福井県青年の扶助組織とその演説（五）／小宮山道夫 31
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）34
編集後記 35

〈31 号〉
コラム活動報告記録「神辺靖光先生宅訪問記」／

〈32 号〉
コラム専門職大学再論／吉野剛弘 2

雨宮和輝 2
逸話と世評で綴る女子教育史(31)　下谷仲御徒町と奥原晴湖、日尾直子の女傑二人／神辺靖光 4
東京文教地区協会連合会の不忍池埋立反対の請願—清家清旧蔵資料ファイルから—／谷本宗生 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(30)学校沿革史にみる補習科・専攻科(26)：広島県(4)／吉野剛弘 12
学生課・学生部について⑥『東北大学五十年史上』(2)／山本尚史 16
近代日本における大学予備教育の研究(31)—大学予科の学科課程同志社大学②—／山本剛 19
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(4)—日本における大学アーカイブズ設置の契機—／田中智子 22
教育における自治(3)石田雄『自治』を読む(2)／冨岡勝 27
　続報　今年は「女学校と女子教育」がテーマ旧制高等学校記念館「第 22 回夏期教育セミナー」／金澤冬樹 29
刊行要項(2015 年 6 月 15 日現在)31
編集後記 32

逸話と世評で綴る女子教育史(32)　明治のはじめの女学校長／神辺靖光 5
北海道帝国大学学生課『学生と健康』(1935 年)を読む—医学部教授兼学生主事;井上善十郎編著—／谷本宗生 8
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(31)学校沿革史にみる補習科・専攻科(27)：広島県(5)／吉野剛弘 11
学生課・学生部について⑦『東北大学五十年史上』(3)／山本尚史 13
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(4)—日本の大学アーカイブズの目的と事業—／田中智子 15
教育における自治(4)石田雄『自治』を読む(3)／冨岡勝 20
予告東京大学駒場博物館所蔵第一高等学校絵画資料修復記念—知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育—／冨岡勝 24
刊行要項(2015 年 6 月 15 日現在)25
編集後記 26

〈33 号〉
コラム元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義—学校資料の保存と活用の観点から—／一色範子 2
逸話と世評で綴る女子教育史(33)　跡見花蹊と跡見女学校／神辺靖光 7
敗戦後東京の文教地区計画の動きについて—／中村登一(東京美術学校)の筆記録(1947 年)から—／谷本宗生 10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(32)学校沿革史にみる補習科・専攻科(28)：岡山県(1)／吉野剛弘 13
学生寮の時代⑧—全国中学校長会議で議論された「寄宿舎問題」—／金澤冬樹 18
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(6)—立教学院史資料センター「庶務課文書」—／田中智子 24
教育における自治(5)石田雄『自治』を読む(4)／冨岡勝 30
刊行要項(2015 年 6 月 15 日現在)33
編集後記 34

〈34 号〉
コラム 元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義—学校資料の保存と活用の観点から—(承前)／一色 範子 2
逸話と世評で綴る女子教育史(34) 下田歌子と桃夭女塾 ／神辺 靖光 6
元第一高等中学校教諭(画学)佐々木三六の動向—石川県尋常中学校教諭として活動— ／谷本 宗生 10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(33)学校沿革史にみる補習科・専攻科(29)：岡山県(2) ／吉野 剛弘 12
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(7)—早稲田大学大学史資料センター「3号館旧蔵資料」— ／田中 智子 15
教育における自治(6) 石田雄『自治』を読む(5)／冨岡 勝 20
刊行要項(2015 年 6 月 15 日現在) 22
編集後記 23

〈35 号〉
コラム 2017 年に教育史研究の意義を実感したこと—教育勅語の歴史、寄宿舎の歴史—／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史(35)　華族女学校開校／神辺靖光 6
大東文化学院教授小松武治について—夏目漱石らの思いも受けて—／谷本宗生 10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(34)学校沿革史にみる補習科・専攻科(30)：岡山県(3)／吉野剛弘 12

〈36 号〉
コラムある受験生(1938 年)の生活ぶり—受験シーズンの到来を前に—／谷本宗生 2
逸話と世評で綴る女子教育史(36)　—華族女学校の下田歌子—／神辺靖光 4
1947 年度の大東文化学院専門学校生徒募集要項—天下の大東文化学院志願者に告ぐ!!—／谷本宗生 9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道(35)学校沿革史にみる補習科・専攻科(31)：

学生寮の時代㉘—旧制中学校にどれほど寄宿舎生がいたか—／金澤冬樹 16
『新潟新聞』にみる高等中学校関連記事—当該期の新潟地域の新聞について—／小宮山道夫 23
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）25
編集後記 26

岡山県（4）／吉野剛弘 12
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考①—仏教系私学・日蓮宗を事例として—／雨宮和輝 16
学生寮の時代㉑—学年別における寄宿舎生の割合は？—／金澤冬樹 19
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（8）—専修大学総務部大学史資料課—／田中智子 28
教育における自治（7）石田雄『自治』を読む(6)／冨岡勝 32
『新潟新聞』にみる高等中学校関連記事—高等中学校設置趣旨と高等中学資金募集要領—／小宮山道夫 36
第 4 回執筆者交流会記録／雨宮和輝 39
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）43
会員消息 44

〈37 号〉
コラム大学職員の世界から見えるもの／金澤冬樹 2
逸話と世評で綴る女子教育史（37）　—真言宗のお寺ではじまったキリスト教の女学校—／神辺靖光 6
1973 年度の大東文化大学父兄会定例総会にて—大学側の近況報告—／谷本宗生 10
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考②—仏教系私学・日蓮宗を事例として（2）—／雨宮和輝 12
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（36）学校沿革史にみる補習科・専攻科（32）：岡山県（5）／吉野剛弘 14
シンポジウム「知られざる明治期日本画と「一高」の倫理・歴史教育」に参加して／冨岡勝 18
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）22
会員消息 23

〈38 号〉
コラム「大学が壊れる」を読んで／松嶋哲哉 2
逸話と世評で綴る女子教育史（38）　—築地の海岸女学校—／神辺靖光 4
服部嘉香旧蔵の早稲田大学専門部ファイルから—1938 年の早稲田大学専門部入学生に対する注意—／谷本宗生 8
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考③—仏教系私学・真言宗を事例として—／雨宮和輝 13
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（37）学校沿革史にみる補習科・専攻科（33）：岡山県（6）／吉野剛弘 16
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（9）—日本大学企画広報部広報課—／田中智子 21
吉田寮の教育的役割を一般的な資料で説明する試み／冨岡勝 26
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）32
「短評・文献紹介」欄の新設について編集世話人 33
会員消息 34

〈39 号〉
コラム『宗教と教育に関する学説及実際』における非宗教者から見た宗教と教育のあり方／雨宮和輝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（39）－米国メソジスト婦人外国伝導局－／神辺靖光 5
東京帝国大学医学部卒業を控えて、医学生はなにを想う－『なあべる』第4号（1940 年3月）から－／谷本宗生 8
近代日本における大学予備教育の研究（32）－大学予科の学科課程同志社大学③－／山本剛 10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（38）学校沿革史にみる補習科・専攻科（34）：岡山県（7）／吉野剛弘 13
教育における自治（8）石田雄『自治』を読む(7)／冨岡勝 16
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）18
短評・文献紹介 19

〈40 号〉
コラム初年次教育としての自校史教育について考える／田中智子 2
コラム「黄金の一週間」～学生を見る目を養う～／金澤冬樹 5
逸話と世評で綴る女子教育史（40）　—聖公会の立教女学校誕生—／神辺靖光 9
第四高等学校の「教授の横顔」—『全国上級学校大観』（1938 年 11 月）から—／谷本宗生 13
近代日本における大学予備教育の研究（33）—予科生の宗教教育同志社大学④—／山本剛 16
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（39）：総括／吉野剛弘 19
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考④—高野山と京都の真言宗の教育機関（1）—／雨宮和輝 22
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（10）—福岡女学院資料室—／田中智子 24

会員消息 21

〈41 号〉
コラム入試の出題ミスに思う／吉野剛弘 2
逸話と世評で綴る女子教育史（41）　—聖公会の日本伝道と教育活動—／神辺靖光 5
『文京区史[70 年史]』の教育史を担当して—高度成長と変わりゆく都市（1966～1977 年）から—／谷本宗生 9
学生寮の時代㉒—「寄宿舎」名称問題から見える「教育的意味」—／金澤冬樹 13
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（11）—九州大学大学文書館—／田中智子 16
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考⑤—高野山と京都の真言宗の教育機関（2）—／雨宮和輝 20
近代日本における大学予備教育の研究（34）—予科生の宗教教育②同志社大学⑤—／山本剛 22
教育における自治（10）石田雄『自治』を読む(9)／冨岡勝 25
『新潟新聞』にみる高等中学校関連記事—高等中学資金募集批判—／小宮山道夫 28
我流・文献紹介(2)—第 2 次・第 3 次「学監ダヴィトモルレー申報」—／神辺靖光 32
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）36
短評・文献紹介 37
会員消息 38

〈42 号〉
コラム寮をめぐるさまざまな対話の可能性／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（42）　—立教女学校・雛から成鳥への過程—／神辺靖光 5
『文京区史[70 年史]』の教育史を担当して II—安定成長からバブル経済へ（1978～1990 年）から—／谷本宗生 9
近代日本における大学予備教育の研究（35）—予科生の教育同志社大学⑥—／山本剛 12
教育史研究の周辺① 教育社会学と隣接領域加藤善子 15
河合榮治郎の「女性の教養」観①／末松亜紀 18
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考⑥—神道系高等教育機関に関する分析（1）—／雨宮和輝 21
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（12）—北海道大学大学文書館—／田中智子 24
教育における自治（11）石田雄『自治』を読む(10)／冨岡勝 28
我流・文献紹介(3)—全集叢書に収録されると文献が見えにくくなる—／神辺靖光 31
　お知らせ・続報　「君たちはどう生きるか～教養の過去と現在」—旧制高等学校記念館「第 23 回夏期教育セミナー」告知—／金澤冬樹 34
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）36
短評・文献紹介編集世話人 37
会員消息 38

〈43 号〉
コラム 早大勤労報国隊『稲影』創刊号（昭和 20 年 7月中旬）を手にして ／谷本 宗生 2
逸話と世評で綴る女子教育史（43）　—神戸ホーム開設までの経緯— ／神辺 靖光 5
『文京区史[70 年史]』の教育史を担当して III —バブル崩壊・高齢化と区政（1991～1999 年）から—／ 谷本 宗生 9
近代日本における大学予備教育の研究（36） —二年制予科併置の理由 同志社大学⑦— ／山本 剛 12
教育史研究の周辺② 学校を経由した社会移動研究（族籍編）／加藤 善子 16

〈44 号〉
コラム被爆 70 余年を経て／小宮山道夫 2
逸話と世評で綴る女子教育史（44）　—神戸英和女学校となる—／神辺靖光 8
『文京区史[70 年史]』の教育史を担当して IV—区政改革と区民参画（2000～2009 年）から—／谷本宗生 12
近代日本における大学予備教育の研究（37）—二年制予科併置の理由同志社大学⑧—／山本剛 15
教育史研究の周辺③ 学校を経由した社会移動研究（職業分類編①）／加藤善子 18
河合榮治郎の「女性の教養」観②／末松亜紀 21
大阪市の女子教育⑩—大阪市立西華高等女学校

河合榮治郎の「女性の教養」観⑦ ／末松 亜紀 20
大阪市の女子教育⑰ —西華高等女学校専攻科から 女子専門学校への「昇格」運動・その 1—／ 徳山 倫子 24
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（13）—信州大学大学史資料センター— ／田中 智子 27
教育における自治（12） 石田雄『自治』を読む(11) ／ 冨岡 勝 30
我流・文献紹介(4) —『学監考案日本教育法』と土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』— ／神辺 靖光 33
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在） 36
短評・文献紹介 37
会員消息 38
専攻科から女子専門学校への「昇格」運動・その 2—／徳山倫子 24
教育における自治（13）大島正徳の自治論(1)／冨岡勝 28
我流・文献紹介(5)—私が高等学校教育課程の研究に嵌はまり込んだ経緯—／神辺靖光 33
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）37
短評・文献紹介 38
会員消息 39

〈45 号〉
ラム追手門学院大学将軍山会館における資料展示／徳山倫子 2
逸話と世評で綴る女子教育史（45） —同志社の発端—／神辺靖光 4
『文京区史[70 年史]』の教育史を担当して V—みんなが主役のまちへ（2010～2017 年）から—／谷本宗生 8
大阪市の女子教育⑱—大阪市立女子専門学校における生活科学科設置構想と授業内容—／徳山倫子 10
近代日本における大学予備教育の研究（38）—二年制予科併置の理由同志社大学⑨—／山本剛 13
教育史研究の周辺④学校を経由した社会移動研究（職業分類編②）／加藤善子 17
河合榮治郎の「女性の教養」観⑧／末松亜紀 21
教育における自治（14）大島正徳の自治論(2)／冨岡勝 25
我流・文献紹介(6)—『米国教育使節団報告書』について—／神辺靖光 30
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）35
短評・文献紹介 36
会員消息 39

〈46 号〉
コラム静岡大学雄蒲寮図書室の蔵書目録作成を終えて／猪瀬貴大 2
逸話と世評で綴る女子教育史（46） —同志社女学校はじまる—／神辺靖光 6
伊藤儀助（二高 1926 年卒）の旧蔵写真帳を手にして—伊藤儀助と二高卓球部のかかわり—／谷本宗生 9
近代日本における大学予備教育の研究（39）—二年制予科関西学院大学①—／山本剛 12
教育史研究の周辺⑤学校を経由した社会移動研究（地理移動編①）／加藤善子 16
河合榮治郎の「女性の教養」観⑨／末松亜紀 20
明治後期に興った女子の専門学校（1）さきがけ—明治女学校の開校／長本裕子 24
大阪市の女子教育⑲—大阪市立大学家政学部の設置—／徳山倫子 29
京都帝国大学創立期における寄宿舎像の模索／冨岡勝 33
我流・文献紹介(7)—6・3・3 制の強行と「学習指導要領」の作成—／神辺靖光 37
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）41
短評・文献紹介 42
会員消息 43

〈47 号〉
コラム教養と自主性～「教養教育」という陥穽～／金澤冬樹 2
逸話と世評で綴る女子教育史（47） —函館の遺愛女学校と長崎の活水女学校—／神辺靖光 5
三輪福松（1911～1998 年）の二高図書閲覧票を手にして—第二高等学校内の図書閲覧環境—／谷本宗生 9
明治後期に興った女子の専門学校（2）教育課程から見た明治女学校／長本裕子 11
教育史研究の周辺⑥学校を経由した社会移動研究（地理移動編②）／加藤善子 15
河合榮治郎の「女性の教養」観⑩／末松亜紀 18
近代日本における大学予備教育の研究（40）—文

〈48 号〉
コラム中教審答申「新しい時代における教養教育の在り方について」（2002 年）を読む／冨岡勝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（48） —美子皇后、帝国憲法発布式典に参列—／神辺靖光 6
朝永振一郎の旧制高校時代の恩師—堀健夫の数学（力学）との出会い—／谷本宗生 12
明治後期に興った女子の専門学校（3）明治女学校開花／長本裕子 15
教育史研究の周辺⑦学校を経由した社会移動研究（地理移動編③）／加藤善子 19
河合榮治郎の「女性の教養」観⑪／末松亜紀 22
明治以降の宗教系私学・宗教界に関する論考⑦—神道系高等教育機関に関する分析（2）—／雨宮

部省督学官の視察関西学院大学②—／山本剛 23
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（14）—中央大学広報室大学史資料課—／田中智子 28
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（1）／冨岡勝 32
我流・文献紹介(8)—体験からみた新制中学校の実態—／神辺靖光 36
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）41
短評・文献紹介 42
会員消息 43

和輝 25
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（15）—東北大学学術資源研究公開センター史料館—／田中智子 28
我流・文献紹介(9)—東京都の私立委託新制中学校—／神辺靖光 33
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）37
短評・文献紹介 38
会員消息 39

〈49 号〉
コラム日本の宗教教育のあり方について／雨宮和輝 2
逸話と世評で綴る女子教育史（49）　—下関の芸妓小梅が日本最初のファーストレディになる—／神辺靖光 6
学都金沢での金沢高等工業学校の位置付け—『全国上級学校大観』（1938 年 11 月）の記述から—／谷本宗生 11
教育史研究の周辺⑧学校を経由した社会移動研究（地理移動編④）／加藤善子 14
河合榮治郎の「女性の教養」観⑥／末松亜紀 17
明治後期に興った女子の専門学校（4）明治女学校の変化／長本裕子 20
カレッジノベルの研究への道（1）：なぜカレッジノベルを扱うのか／吉野剛弘 24
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（16）—明治大学史資料センター—／田中智子 27
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（2）／冨岡勝 32
我流・文献紹介(10)—東京都の私立高等学校—／神辺靖光 36
刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）40
短評・文献紹介 41
会員消息 42

〈50 号〉
コラム児童虐待事件と法制度改革／田中智子 2
逸話と世評で綴る女子教育史(50)　—ラグーザ玉とクーデンホフ光子—／神辺靖光 6
1918（大正7）年3月郁文館中学校編入受験生 SY の日記—1917 年 12 月 11 日から 1918 年3月 31 日—／谷本宗生 11
明治後期に興った女子の専門学校（5）巌本善治と『女学雑誌』／長本裕子 15
教育史研究の周辺⑨学校を経由した社会移動研究（再生産戦略編①）／加藤善子 19
カレッジノベルの研究への道（2）：アメリカの研究に見るカレッジノベル（1）／吉野剛弘 22
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（3）／冨岡勝 25
我流・文献紹介(11)中高連提出の「高等学校教育課程改訂に関する要望書」／神辺靖光 33
「高円寺の会」の記録末松亜紀 38 刊行要項（2015 年 6 月 15 日現在）40
短評・文献紹介 41
会員消息 42

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

急募！　灘中学校・高等学校の
史料整理・目録作成に興味ありませんか？

加藤（かとう）　善子（よしこ）（信州大学）

灘中学校・高等学校（神戸市東灘区）の史料室の整理を手伝ってくださる方を探しています。まだ手のついていないものが多い状態で、史料室担当の先生から、「資料整理・目録作成については、大学院生や若い研究者に手伝ってもらいたい。整理した史料を使って論文を書いてほしい」と言われています。今年度、私の科研も採択されましたので、協力してくださる方には旅費と日当をお支払いすることができます。

科研費に採択された「近代都市における中等教育利用に関する基礎的研究―実業層の学校利用を中心に―」（2019年度より4年間）は、近代実業都市・神戸における、実業層の学校利用を明らかにするためのものです。灘中学校は昭和2年に、灘の酒造家である加納家（白鶴酒造）と山邑家（山邑酒造）の篤志によって設立された学校で、私の研究では、酒造産業と中学校設立の関係を明らかにすることが目的です。この時期にはすでに7年制の甲南高校が設立されており、この直後には甲陽中学校が設立されるなど、酒造産業の関係者が阪神間に次々と私立中学校を設立していく時期です。

この研究計画では、灘校の史料については、「資料整理・目録作成」を目的としています。史料をどのような研究に活用するかは、みなさんの自由です。どんな史料が眠っているかはっきり分かりませんが、これまで史料室が研究で利用されたことはほとんどないそうで、宝の山だろうと思います。戦後の史料もありますので、ご興味ありましたら、まずはご連絡ください。

連絡先：加藤善子（信州大学）　katoy@shinshu-u.ac.jp

短評・文献紹介

全国大学史資料協議会の2017年度全国研究会（於：愛知大学）「新制大学発足をめぐる各大学の動向―その資料と活用―」の記録冊子である『研究叢書』第19号（2018年）を、このたび手にして読んでみました。このなかでも、上野平真希さん（当時：熊本大学文書館）が研究報告された「地方国立大学の設立と地域社会―熊本総合大学期成会の資料を中心に―」（70～83頁）は、大学史家としてなかなか興味がひかれます。とくに、上野平さんが取り上げている「南九州総合大学設置運動」（74～75頁）が、戦後の新制国立大学の熊本大学設置へと至るうえで、とても重要な流れであったなどと捉えている点は、私（谷本）も同時期の「北陸総合大学設置運動」を研究していて素直に賛同できました。

ただ上野平さんがご報告された「南九州総合大学設置運動」について、幾つか素朴な疑問やもっと知りたい点なども正直感じてしまいました。これはもちろん、私なりの大学史研究者としての性かもしれませんが。上野平さんによれば、1947（昭和22）年6月に文部省が10総合大学の設置を検討している情報をキャッチし、実際に熊本県関係者らが総合大学運動に「名乗りを上げた」わけですが、1948（昭和23）年5月に実施準備委員会として、南九州総合大学設置運動を進めるための委員会を発足させながら、同年6月には文部省の国立大学設置11原則を受けて、直ぐに熊本総合大学の設置運動へ「方向転換」し、「南九州」としての総合大学構想は「白紙」になったといいます。私のいちばんな疑問点は、1947年の早い段階で文部省側の有力情報を得たほどの熊本関係者らが、国立大学設置11原則が出される翌年6月までの間に、文部省側の政策動向をなんらかでも早い段階で把握できなかったのでしょうか。1つの推測の域・仮説の域ですが、たとえば熊本関係者らも1948年の早い段階で、10総合大学の設置実現が政策上でむずかしいと水面下では把握できていた可能性についてです。かりに設置運動の看板上では、「南九州」と掲げていてもということです。

次に、熊本関係者らが「南九州」として想定していた大分・宮崎・鹿児島らの動向変化もたいへん気になるところです。上野平さんによれば、鹿児島は自分らで独自に総合大学を建てたいゆえ、熊本側が主張する南九州の枠組みには参加しないが、10総合大学に旧7帝国大学を除いて残り、九州地域が1つも選ばれない危険だけは阻止しないといけないと「意見が一致」します。宮崎も南九州総合大学構想そのものには賛成しますが、その中心を熊本とする点では「保留」と

します。そして大分は、熊本側の南九州総合大学構想に賛同し、本省への「陳情協力を約束」しています。これらの鹿児島・宮崎・大分のその後の動き、推移こそが、熊本側の動きと並行して、もっと知りたい点といえるでしょう。（谷本）

中高生のころ将棋が好きだった。雑誌『将棋世界』を講読して、「次の一手」の正解をためて「初段」をもらって喜んだりしていた。そんなこともあって、先崎学著『うつ病九段　プロ棋士が将棋をなくした一年間』（文藝春秋、単行本・電子書籍ともに2018年刊）というタイトルに惹かれて電子書籍で購入した。先崎学という棋士のことは、将棋が強いだけでなく雑誌などに軽妙な文章を書いていたので以前から親しみを感じていたので、「そんなことがあったのか。」と驚きながらも、気軽に読み始めた。例えば次のようなことが書かれていて「なるほど」と思った。「本物のうつ病の症状を当事者としてひと言でいうと無反応だ。喜びにも悲しみにも反応がなくなってしまう。はじめは悲しいとか辛いとかで単なる『うつ状態』なだけかもしれないが、病気となり一線をこえるとあらゆる感受性が消えてしまう。それは人間の生理学的な反応なのだろうが、もっと動物的なものだと思う。人間の進化した脳といえども、所詮は類人猿の一器官に過ぎないのである。いうまでもなく本書における「うつ」という表現は、生理学的で動物的な「うつ病のうつ」のことである」。「うつ病のうつ」を経験した人が、この病気のことを書いた本は少ないらしい。貴重な本を出してくれたと思った。（冨岡）

会員消息

小学生時分から大学進学で東京へ上京するまで生活していた山口県下関市の実家に、久しぶりに帰省しました。山口市で現在生活する6歳上の兄とも、下関の実家でゆっくり会って話すことができました。日ごろ東京に普段居て気になっていた、下関市内にある幾つかの親族家のお墓参りも行えました。お墓やご先祖供養・・といえば、水木しげるさん原作の「ゲゲゲの鬼太郎」の最新（第6期）アニメシリーズ第23話「妖怪アパート秘話」で、1968年当時、まだ建てたばかりな壮快アパートの経営を始めた新婚夫婦から、鬼太郎はアパートに居座ろうとする妖怪らの退散依頼を受けます。結局、鬼太郎と夫婦と妖怪らの話し合いの結果、居住する住民らに迷惑をかけないことを約束した妖怪らの存在を容認します。そして時が経ち現代、独りになったその夫婦の孫娘が何も知らず古くなったアパートの取壊しを検討し始めます。しかし、アパートの妖怪らが彼女の親族に代わって、彼女の成長をずっと見守って来てくれたことにようやく本人が気付きます。その結果は・・。また同シリーズ第40話「終極の譚歌　さら小僧」では、かつての一発芸人で、今や鳴かず飛ばず状態のピン芸人が、ある日川で妖怪のさら小僧が楽しく持ち歌を唄っている姿を目撃します。芸人は、悪気なくさら小僧の持ち歌を自身の芸として披露すると、不思議と再ブレークして人気が出始めます。無断で持ち歌を盗まれたと気付いたさら小僧は激怒し、彼に危害を加えます。そこで鬼太郎が登場し、さら小僧の持ち歌を二度と歌わないことを条件に事件を仲裁します。しかし、芸人は愛する家族が、自分がたとえ売れなくてもずっと優しく見守って来てくれたことをよく痛感していたのですが・・。これらお話のてん末などについては、皆さん、どうぞアニメ作品をご覧ください。いずれも正直、ぐっと泣けます。（谷本）

早いもので季節はもう春…センバツ高校野球も始まりました。出身県と現住所の県の高校はとっくに敗れてしまったのですが、それでもテレビをつけると、高校球児たちの熱き闘いに目を奪われ、いつの間にかどちらかの高校を応援し始め、しばし観戦してしまいます。結果、やるべきことがなかなか進まないという…この時期と夏休みは“危険”です（苦笑）。（田中智子）

今回、大急ぎで書いた科研の申請が採択され驚きましたが、じわじわと喜びが湧いてきました。大急ぎで申請書を書けたのは、このニューズレターを書くために毎月勉強したからだと思います。小さいことをコツコツと続けることが、成果に結びつくことを教えていただきました。皆さんありがとうございます！　（加藤）

雨宮さんの尽力で、ニューズレター第50号までの総目次ができました。約4年間でたくさんの研究交流ができたことに驚いています。こうした記事を足がかりにして、多くの方から批評を受けながら大きな研究につなげていくことが、同人の次の楽しみだと思います。そんなことを思っていたら、谷本さんの発案と神辺先生からの詳しいアドバイスを受け、3月17日に神辺邸で神辺先生・谷本さん・加藤雄大さん・冨岡で相談して、以下の企画を始めることになりました。（冨岡）

＜第1回「ニューズレター・コロキウム」のお知らせ＞

第50号を契機に、年に1～2回ぐらいのペースで始める企画として、「ニューズレター・コロキウム」を開始します。同人のだれかがニューズレターに発表してきた研究に着目し、研究への疑問点や今後の進展について活発に話し合おうというものです。第1回は、冨岡の研究を取り上げていただくことになりました。これまで冨岡がニューズレターに書いてきた旧制中学校の「自治」研究などに対して、神辺先生と谷本さんに「指定討論者」として冨岡研究への質問やコメントなどをお話しいただき、それに対して冨岡が応答し、他の参加者とも自由に話し合い、加藤雄大さんに記録記事を書いていただこうという内容です。みなさん、ご関心がありましたら、ぜひご参加ください（第2回以降への立候補もぜひ）。

日時　2019年6月2日（日）　13時30分開始、約2時間

（当初、5月12日としていましたが、諸事情により変更となりました）

場　　所　神辺先生邸（高円寺駅下車徒歩約15分）

参加連絡　ご参加いただける場合、1週間前までに冨岡まで。

本ニューズレターＰＤＦファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader　などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子ができます。